

者、支那に其の例多きも、彼程の大事を惹起し、は、和漢古今に例なからん、斯くて徳川氏の世と爲りて、僣武右文の治を見るを得たり。

附 載

加藤清正の學問

我れ死せば具足着させ、太刀刀をはかせて棺に入れ納むべし、末世の軍神たらんとは、加藤清正臨終の遺言なる由、清正記に記せるを、續撰清正記は之を駁して偽作と爲せり、吾人も亦正直なる清正の人格に觀て、自ら軍神たらんと言ふべき筈なしと思ふ、然れども三百年後の今日より清正の傳記を按じて、其の精神其の人格其の功業を偲び來れば、眞個末世の軍神として、欽仰景慕すべき一大偉人たるを失はず、而して三百年祭舉行の日に、其の功績を追念したまひて、從三位を贈られしは、甚深なる教慮の存するなくんば、あらじ、則ち吾人は公の三百年祭を祝るに、有觸れたるお祭騒を以せず、眞面目なる感想の上に、公の人格を追慕して、末世の精神教育に資する所なかる可らず。

清正の遺言

末世の軍神

清正の武功

公の武功は太閤記に依りて、若くば講談演劇の類にまでも謳歌せられて、兒童走卒にも知られたり、年二十鳥取城の一騎打を初め、山崎合戦の働、志津嶽の七本槍、小牧合戦の殿は言ふに及ばず、朝鮮陣の武勇數へ盡し難く、其の威名は明韓に轟きて、鬼將軍の名は兒啼を止むるに至れり、物徂徠其の驍勇を誇張して云く、高麗人は諸を羅刹夜叉人を敵ふの類に比す、威武の懾伏する所知るべきのみと、公果して鬼か、羅刹夜叉か、是れ虎狼の威のみ、匹夫の勇のみ、曷んぞ軍神と爲すに足らん、淺い哉、徂徠の公を視るや。

公は固より武勇一偏の大將に非ず、其の德澤功業は、皆學問の力に得たる者なり、少くして兵學を塚原卜傳が遺類なる塚原小才次に受け、最も築城の術に長じ、熊本城の清正石垣、加藤土居など、皆其の長技を示さざる莫く、築城術より延きて、一般工學の妙用に及び、河川の修築、田地の新開墾等、封内の大土工は概ね皆公の計劃に成り、治水の功は言ふも更なり、心を經濟に留めて、農工の發達を奨励せし如き、一面には名將にして、一面には大工、學家たり、大政治家たり、肥の民今に至りて、其の遺澤に浴し、鬪慕衰へざるも、亦宜ならずや。

大工學家
大政治家

清正の德澤功業

格 清正の性

而も吾人の公を欽仰する所以の者は更に形而上に在り、
 清正公の事を記せる諸書を讀むに、公は舞淨瑠璃又は昔物語にも哀なる事を聞きては涙もろき人なり、人に恥をかゝせぬ人なり、深く傍輩同士の蔭言を戒め、士を愛しては一刻も猶豫せず、廁の中より草履取の出來助を擢用し、民を憐みては御慈悲深き太守と崇められ、自ら奉ずるは質素にしてはき人と云はれても、物を與ふるには吝む所なく、君に事へては誠忠無二にして、豊臣氏の恩を忘れざりし事蹟は、尙史に赫々たり、是等の事實を綜合して公の爲人を想見するに、帝釋粟毛に跨りて、重き鎧に厚き刀、片鎌の槍立てたる大兵美將の大將、一見して鬼神の如くなりけん、公は實に忠恕にして明敏、仁慈にして摯實なる儒雅の君子人たりしなり、是れ豈天性の美のみにして能く然るを得んや、公は藤原惺窩に従ひて論語を讀み、後ち江村專齋那波活所等を聘して程朱の學を聴き、上國への往來船中に在りても、常に笹屋宗嗣をして論語を讀ましめ、且手づから朱を加へ、其の座を立ちたりし間に愛狙塗抹せしを見て一笑に附したりと云ふ、晩年東西の不和を憂へて、論語の可以

儒雅の君子人

問 清正の學

元天以來一人

文武兼備

型 武人の典

托六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節、不可奪者、君子人與、君子人也の章を誦し、今日の世、此の語を事とせざらん者は、不義の人也と云ひしが如き、誠に學問の明效なり、又日蓮宗を信じ、七字題目の旗差物に信念を標榜して、大勇の根柢する所あるを示せり、多殺の武人、往々慰安を宗教に求む、公の佛法に於けるも亦或は然らん、而して其の勇且仁なる所以の者は、亦此に獲る所の者ありけん、天性の正直摯實に加ふるに儒釋二教の修養を以して、此の武人の好典型は成れり、而して其の忠誠惻怛は元天以來一人なり、正成の南朝に忠なる、清正の豊臣氏に忠なる、其の忠や一なり、機山の兵法、鬼柴田の驍勇ありといふとも、忠なくんば則ち虎狼のみ、公此の忠ありて、而して士を愛し、民を憐み、兵法工學に通じて、政治經濟に長ず、豈文武兼備に非ずや、末世の軍神として、欽仰景慕すべき所以なり。

凡そ大人君子と云ひ、英雄豪傑と云ふ者、天性如何に美なりとも、不學にして功業を立て、徳澤を布く者あるべき様なく、精神の修養に力めずして、武人の典型、末世の軍神と稱せらるゝ者は、未だ之あらず、則ち古の偉人を三百年後

の今日に欽仰景慕する者、亦自ら學び自ら修養する所なくば、何の靈驗感應か之あらん、吾人は青年子弟の三思を望む。此の一篇は明治四十二年三月十二日、從三位を清正に贈られし時子が作りし論文にして、初め末世の軍神と題し、翌十三日の大阪朝日紙上に載せたりしを、此に改題轉載して以て學問の明效を示すと云爾（天因生識す）

（十二） 文教の興隆

一、 朝廷の學

勢極まれば則ち反り、物窮まれば則ち變す、應仁以來の兵亂は、元龜天正の際に至りて其の極に達し、織豊二氏一起一仆して、文祿慶長の征韓役に、時運の一轉機を來し、亂を厭ひて治を思へる天人、感應の力は、能く乾坤を旋轉して、文治の新局面を展開せり。

時運の一轉機
後陽成天皇の勅板
朝家空前の盛事
一字板
木活銅活の製鑄

時の帝は後陽成天皇におはしまして、天性學を好みたまひしが、慶長二年には錦織段及び勸學文を同じく四年には、四書白文六冊及び日本書紀等を勅板施行あり、是れ實に朝家空前の盛事にして、文教興隆の瑞符なり、其の事近藤正齋の慶長勅板考に詳なり、其の板は一字を一様に鏤はめて、諸を一板に基布し一紙に印すとあれば、活版なること分明なり、活版は俗に一字板と稱して、此の比より世に行はれしは、正しく朝鮮陣の戦利品ならん、此より我も亦能く自ら木活銅活を製鑄して、印書の業盛に行はれたり、豊臣氏に代りて大權を掌握したりし徳川家康は、

徳川家康の印書

足利學校の三要に命じて、木活數十萬を作り、四書白文印行と同年に、孔子家語、三略、六韜を印行し、翌年は貞觀政要、三略を、同じく十年には、東鑑、周易を、同じく十一年には七書を活刷し、又羅山及び金地院崇傳に命じて、慶長二十年には銅活もて大藏一覽を、元和二年には群書治要を印刷せしめたりき、慶長日伴錄十年四月二十八日の條に、高麗銅一字印、返進上之、自將軍銅一字印、令新調可被進之由申上畢とあり、高麗銅一字印は即ち戰利品なるべし、翌十一年六月六日には、家康果して三要に命じて作らしめし銅印字大小九萬二千二百六十一個を獻じて、觀感に預りしことも見えたるが、後ち大藏一覽印刷の時、銅活八萬九千四百十四字を、百箱に入れて收藏せりとあるは、献上の銅活と同一物の返賜されし者なりや、將た献上の外に百箱を收藏せしや否やを知らざるも、本邦銅活鑄造の始は、蓋し銅活献上の慶長十年比に在り、而して彼の群書治要印刷の時も、歸化明人五官をして不足の字一萬三千餘を鑄造せしめたりとあれば、朝鮮人の俘虜中に鑄工ありて斯業は傳へしなるべし、文化の普及は、印書の盛行と相待たざる可らず、昔時は典籍希少にして、皆傳寫に出づ、教化の普及し難かりしや當然なりしに、今や木活銅活の

高麗銅一字印

銅活献上

俘虜中の鑄工

印書起りて、而して文教は元和寛永に勃興せり、是れ實に帝と家康との賜に非ずや。

清原秀賢

後陽成帝の侍講は清原秀賢なり、業忠の孫は宣賢、宣賢は業賢を生み、業賢は國賢を生む、國賢は秀賢の父なり、秀賢幼より學才あり、父國賢の外に出るや、常に秀賢を眷に容れて之を空に釣り、之に書物を與へ、我が歸る比までには讀み了へよと命じて出行き、歸り來て其の課業を終らざるを見れば、眷より下さず、酷暑嚴寒にも亦然りきとぞ、其の勉學知るべきなり、慶長十二年四月四日には大學を進講し、閏四月九日より論語を、八月十九日より孟子を進講し、孟子の講には聽衆百餘人ありしと云ふ、學廡は朱子章句を用ひ、論孟は古註を用ふるは、業忠以來の家法なること前にも云へり、然れば秀賢の古註家たるは論を待たず、然るに帝は又嘗て文之を召して新註の講をも聞召されたりき、御子後水尾天皇も亦學を好ませられ、程朱派の江村專齋を召して鳩の杖を賜はりしは、儒林の榮典として語り傳ふる所なるが、其の御子後光明帝に至りて、最も程朱の學を信じたまへり、古來の經筵に、論孟は本註を用ひたりしを、帝には古賢と雖も擇んで其の善なる者にこそ

秀賢の進講

江村專齋の榮

後光明天皇の好學

朝山意林

冷泉爲景

尺五堂

松永昌三

從へ何ぞ新古を別たんとて、朝鮮の李文長に學びて宋學を奉じたりし朝山意林
 菴を召され、六位の袍を賜ひて易經を進講せしめられ、又性理大全の上梓あり、惺
 窩文集には御製の序文をさへ賜はりき、是れ實に空前の殊寵なり、又惺窩の子冷
 泉爲景を召して經筵に侍せしめ、南門の閑地に聖廟を立て、尺五堂といふ學校を
 設けて、惺窩門の松永昌三をして釋奠を行ひ、王子皇孫官家武弁に教授せしめた
 まへり、是に至りて朝廷の學は將に一變せんとせしも、幕府の壓迫は、朝家をして
 興學の舉を自由ならしめず、博士家も亦固陋自ら甘んじて舊學を墨守し、聖意を
 恢宏して文教の權を立つるを知らず、遂に文武の二大權を併せて德川氏の手に
 落ちしむるを致せり、深慨せざる可けんや。

附 載

日本二十四孝贊傳

昨非菴

瀧川昌樂

後光明帝
の御孝行

後光明帝は後水尾院第二の皇子、生れながら聖德まし／＼とて、日東の儒宗明
 壽院惺窩先生の子冷泉爲景を侍讀の官となし給ひ、學問し給ふ、殊に宋眞宗

聖廟と學
校

仁宗の勸學文を用ひ給ひ、人として道を行はざれば、鳥獸の襟裾猿狙の冠佩
 したるが如しと云ふことを御覽ありて、京兆尹板倉防州に命じて、九條宮の
 南隣南門の外に閑地あり、コレに孔子の廟を築きて都の學校に擬す、此堂天
 子の南門より一尺五寸あればとて、石川丈山云く、杜詩去天只尺五と作るは、
 漢城の天子の御門を去る五尺あればとて、尺五堂と名く、松永昌三を居らし
 め、王子皇孫官家武辨の輩を學文の爲に、四書五經百家の書を誦讀せしむ、京
 師の貴賤皆來り學ぶ、こゝを以て昌三京洛に久しく廢れたる釋菜の禮を興
 し、絶たる禮樂を繼て、毎歲二月上丁の日は、伶人を招き音樂を鼓舞して孔子
 を祭れり、帝學文を好み給ひて、殊に易を崇み給ひ、石川丈山に命じて、乾元亨
 利貞の五字を八分に書しめて坐右に掛けたまひ、易理を悟りまします、上亦
 觀の卦に觀天之神道而四時不忒、聖人以神道設教、而天下服矣と云文を、昌三
 に命じて注を假名にて述べしめ、天心を甘なひ給ふが故に、此の日本は萬國
 の父母の國なれば、此帝元祖天照大神の御恩を感じ給ふ御孝心より、彌厚く
 おはしまして、御父帝にいよく御孝行を盡し給ひぬ、天子の御身萬機の政

に御暇なければ、玉體かろくしく仙洞へ出御なされ難きに依て、毎日三度づゝ勅使を立られ、御機嫌を伺ひ給ふ。若又御遠例ましますれば、天子御寢食安からずして、父帝の御寢なりたまはねば、天子御寢に就き給はずとなり。(續々群書類從に據る)

鳩巢小説

寶直清

後光明天皇の仰せに、儒學とても漢土古註の説は親切に思召されず候間、今後侍講の衆、程朱の新註を以て講すべきの旨被仰候。時の講官二三輩、本朝の古實にて、鄭玄孔安國が註疏を以て侍講仕る事に候。新註にて侍講仕り候は、んはいかゞ之あるべきや、心得難き旨執奏に及ばれ候處、自我作古と申す義は辨なきか、古の賢君にても、善に従はれ候義に候旨仰下り候。之に依り儒業の衆中を始め、禁庭にて朱子の集註を講じ候。御相伴數輩皆新註に従はれ候。其時洛中意林菴と申者、輕き者に候へども、程朱の説に達し候旨報聞に達し、召さるべき旨仰出さる云々。

二、幕府の學

家康と

徳川家康の好學は、獨り天性の美質然らしむるのみならず、其の明眼達識は、關ヶ原役、慶長五年を待たずして、夙に太閤百歳後の天下、誰が手に落つるを知れり、而して馬上天下を治む可らざるをも知れり、是を以て意を文學に留めて、而して其の人を物色せり、是より先き文祿元年始めて、惺窩を名古屋の行營に引見し、翌年江戸に召して、貞觀政要を講せしめしより、意を惺窩に屬して、之を擢用せんとせしも、辭して就かず。弟子羅山を薦めつ、初め羅山徒に授けし時、船橋秀賢之を難して、勅許なければ、經を講ずるを得ずと云ひしに、家康は羅山に左祖して、其の事罷めり、蓋し家康が儒學を以て覇業を羽翼せんとするに當りては、人才を博士の家に求めずして、而して之を草莽儒生に取り、以て朝廷の學と其の歸を同くせざらんことを欲せり、而して博士家の死學能く爲すあるに足らずして、而して惺窩羅山の學能く明效を收むべきは、亦家康の看破せし所、其が秀賢の察度を斥けて、羅山に左祖せし所以の者知る可し、慶長八年征夷大將軍と爲りし家康は、十年羅山

家康の羽

幕府と程朱

文儒を併

家康の讀

五山學僧

家康の學

君子文集

の林又三郎信勝を二條城に召見し、尋ぎて命じて祝髮せしめ、以て儒臣と爲せり。是れ徳川氏が學者を擢用せし始にして、程朱學の幕府に行はれし濫觴なり。是より先き足利學校の三要に命じて學校を伏見に創立せしめしも、遂に京に移して寺と爲し、圓光寺、羅山及び後藤庄次郎が、學校を京師に立んことを請ひしも果さざりしは、文教の權を江戸に收むる所以なりけん。

家康平生好んで東鑑延喜式史漢綱畧貞觀政要を讀み、尤も論語中庸を尊信せり。慶長十九年二月五山の碩徳十五人の學問を駿府に試験せし時も、論語の爲政以德の章を以て題と爲し、が諸長老皆當時の天下太平を頌するのみなりければ、家康悦びず、衆星の之に共ふは、徳を以て政を爲す故なり、然れば其の徳とは何様なることぞと言ひたき者なりと批せしこそ、流石に家康なれ、其が聖經賢傳の大體に達したりしを知るべし。是歲江戸にて秀忠の諸長老に命せし題も、亦論語の君子徳風也の章にて、前後二度の答文は、君子文集といへる一冊の寫本に在り、家康七書を好みて、木銅活板の印行多きは前にも記しつ、大阪冬陣十九年に、家康西上するや、先づ京師に入り、稻紳家の秘本を括訪して、舊記類を一本三通づゝ新寫

紅葉山文庫

三代家光

敬公と孔子

必世而仁

武家の實

せしめたりき、是れ單純なる好書癖に出る者に非ずして、朝家の關係を一定すべき資料なりしか、是より先き太田道灌が望士亭の遺址なる江戸城中の富士見の亭に和漢の典籍を儲藏せり、是れ紅葉山文庫の起原とかや、駿府の藏書も亦甚だ多かりけるを、其の薨後江戸の文庫と尾紀水と三親藩とに分ちたりと云ふ。二代秀忠も亦家法を奉じて心を文教に留め、三代家光に至りては、羅山を以て侍讀と爲し、大學和字抄及び孫子六韜の諺解、并に四書五經の要録を撰びて之を獻せしめしが、尾張の義直、敬公遺訓を守りて最も興學を志し、寛永九年、羅山の爲に孔子堂を忍が岡に立て、翌年家光自ら孔子堂に臨めり、唐様で書く三代目は、獨り個人の身上のみならず、王霸の業も亦二世三世に至らざれば、鴻基遠圖の大成を期す可らず、故に必ず世にして而して仁と云へり、徳川氏の業も亦二代秀忠の賢を以て其の基礎を立て、三代將軍に至りて大勢全く定り、禮樂も亦興りて、武家を責飭する所以の者、漸く其の緒を垂れたりき、而して義直の弟なる紀伊の頼實、南龍公儒を聘して學を講じ、水戸の頼房、威公、光圀、義公神を敬して儒を尊びしは、亦皆家康の遺訓に出で、而して文化を輔益せり。

列侯と文

漢野幸長

保科正之
の輔養編

池田光政
の學校

學者分布

刊書の業

風尚一變

上の好む所下之より甚しき者あり、家康の學を好みて儒を尊ぶや、當時の侯伯、靡然として文學に嚮ひ、前に淺野幸長、細川忠利等、惺窩に師事し、幸長は惺窩を紀州に聘せり、黒田長政は羅山に請ふて座右の訓戒を編するあり、後に保科正之は濂洛の學に精しくして、輔養編を著はし、池田光政の首として、學校を立て、儒道興行を以て自ら任ずるあり、皆風氣の先を爲す者にして、其の餘諸侯も亦争ふて儒員を聘せしより、松永尺五は加賀に、那波活所は紀州に、三宅寄齋は備前に、堀杏菴は尾張に入り、其の他、惺窩の子弟、各藩に分布して、文教の興隆に任せり、而して慶長の一字板は進んで板行と爲り、元寛以降、刊書の業、侯國に行はれ、坊間に起り、絃誦の聲漸く盛なり、時に王學は早く已に中江藤樹に因て、寛永中に唱道せられ、熊澤蕃山之を祖述せしも、繼ぎて而して起る者、寥々、世を擧げて、程朱の學を奉せしも、元寛の際、運は草昧に屬せり、林氏其の儒職を世にし、羅山逝きて、鷲峰出で、詔承して而して宏張し、弘文の名に負かざるも、學說未だ起らず、萬治、寛文の際、朱舜水、水戸に入り、山崎闇齋、海南に起りし比より、風尚一變して、程朱派頗る振ひき。

三、儒學獨立と國學 附儒醫

一千年来
の風尚

神佛混淆
と程朱派

吉川惟足
の神道

山崎闇齋
の垂加派

跡部光海
の祖述

神佛抱合
見

神佛抱合

神佛一體、儒釋不二、是れ我邦一千餘年来の宗教道德上に於ける思想にして、其の淵源を尋ぬれば、佛氏が同化を神儒に求むる所以の狡計に出づ、而して三者相輔け相補ふて、以て國民道德の向上に功ありしは、論を待たざるも、其の説固より牽合に成る、學術開けて而して理想進むに隨ひ、水と油との割判すべきは當然なり、儒學の徳川氏に興るに及びて、神佛混淆の非は、果して程朱派に依りて辯せられたり、羅山の本朝神社考の如き、蓋し其の祖鞭にして、而して尾張の敬公、水戸の義公等、敬神崇儒を以て學問の宗旨と爲す者、亦世の惑を解くに汲々たり、寛文中、吉川惟足の神道を京師に唱ふるや、濂洛派の保科正之尤も之を信じて、而して山崎闇齋も亦之を惟足に受けて、垂加派を創し、跡部光海之を祖述して、鼓吹甚だ力めたり、其説は巫祝陰陽家者流の氣味を帯びて、未だ甚だ醇乎たらざるより、其の高足三宅尚齋、淺見綱齋等、猶且師説を詆る者あり、平田篤胤、詳に之を辨じたり、然れども、其の國體を辨じて、神道を説き、以て神佛抱合の派を開きしは、一見識を謂ふ

儒釋不二

べし、具原益軒が神儒並び行はれて相悖らずと云へるは、蓋し垂加に出で、而して稷正は之に過ぎたり、學者の神佛に對する觀念一變せるは、儒學と神道との興隆を示す者にして、未だ必しも神を引きて儒を助くと爲す可らず。

儒釋不二の説や、唐宋以來の套語にして、武家と僧學との關係は、鎌倉以來の積習なり、文學の權、五山禪徒に在るに當りては、幕府の外交文書を其の手に委せしも、而も足利氏の時、猶且侍讀の儒員を待つに、浮屠の法を以せざりしに、家康の林羅山を擢用するや、故さらに命じて祝髮し、名を道春と改めしめ、與ふるに、刑部卿法印の官を以せしより、儒者は僧形僧官の制と爲れり、事實に於ては、儒學既に獨立の地位に居るも、外形は猶儒釋不二なり、儒釋相助けて以て世道を持するは、寧ろ可なり、儒にして僧形と爲るは、陋なり、家康の賢、豈之を知らざらんや、而も足利時代に半儒半僧の中間人ありて、諸侯に游事せし、陋習を襲ひ、儼然たる儒服の徒に強ふるに、僧形を以せしは、豈潛隱の説の如く、朝廷を憚り、博士家の忌諱を避けん爲なりしか、將た天海崇傳の徒と同じく、顧問に備ふるには、僧形を以て便宜ありと爲せるか、抑學者をして俗間に遠ざかり、意を當世に絶たしめて、以て危險を防

儒者の僧形僧服

儒釋不二の仔細

敬公の儒服

別々の世

儒臣と外

義公の快

聖堂創立

儒學獨立

五代將軍の威風

がんとするに在りしか、何れ仔細ある事なんめれど、徳川氏の文教興隆に於ける一斑取たるを免れず、元和式目を改正する時、尾張の敬公子、年十六にして、儒醫の名を難じ、當今の儒髮を削りて僧に似たり、眞儒と曰ひ難し、宜しく醫隱と稱すべしと言ひ、山崎闇齋も亦世儒剃髮辨を作りて之を誚れる、並に卓見たり。

然るに寛永十一年朝鮮信使來朝の時、幕府羅山に命じて筆語問答せしめ、返簡をも草せしめたる、是れ實に武家外交に儒臣を用ひし始めにして、亦儒釋分立の端たり、學者已に神佛混淆の非を辯す、豈に儒釋不二の説に甘んせんや、延寶中水戸義公、首として儒臣に命じて髮を蓄へしめしより、風氣更に一變を兆し、羅山擢用後約八十五六年を経て、元祿三年に至り、幕府官學を創立して、聖堂と稱し、後に昌平黌とも云ひしが、翌年令を下して、儒者の束髮改名を命せしむ、是に於て、羅山の孫春常名を信篤と改め、大學頭に任じ、儒員大河内春龍は、新助、木下順庵は、平之丞など、改服改稱して、普通士人同様の姿と爲り、儒釋分立して、外形に於ても亦此に儒學の獨立を保ち、以て四五百年來の陋習を脱したりしは、實に五代將軍綱吉の一盛舉と爲す、但儒釋分立して更に儒醫兼業を生じたり、此も亦古來の遺風にし

儒醫業の利弊

儒醫論

富を欲せざる勿れ

國學と儒學との關係

海外卑内の弊

て、北大路道三(曲直瀬翠院)が儒より醫に入りしが如き、松下見林が醫にして儒學に深く、有用の著書に富めるが如き、其餘名古屋玄醫と云ひ、野間三竹と云ひ、儒醫を以て自ら居る者、勝けて數ふ可らず、范希文が天下の名相と爲らずんば天下の名醫と爲らんと云ひし一語は、彼等の金科玉條なり、伊藤仁齋の儒醫辨は、名を盗で俗を欺くを郷愿に比し、太宰春臺の儒醫論は、醫を以て利を求め、儒を以て名を求むるを貴む、是れ皆時病に中りつらん、然れども高明の士、或は醫より儒に進み、市井の窮措大、或は儒より醫に入り、二者相助くる、未だ必しも妨あらざるに似たり、予は後世の俗醫が、徒に利を是れ貪りて、名を惜まざるを悲むのみ、薩の儒醫某(關齋門下)は遺言して曰く、子孫富を欲せば醫と爲る勿れと、是れ豈今人の知る所ならんや。

徳川時代の儒學界に於て、更に注目すべき一事あり、其は國學の勃興が儒學に與へたりし感化なり、支那の文華を尊崇するの餘には、支那崇拜に陥りしこと、隋唐交通以來の學弊にして、猶歐米の長を取ると共に、歐米崇拜に陥りし今日と相似て、其の自尊心を失ふや同じ、自尊に過ぐるは不可なり、然れども自尊心を失ふて

禪僧の支那崇拜

室町外交失體の責任

儒者の弊

彼我中外の別を知らざるは更に不可なり、昔時菅公議して交通を停めしは、唐の内亂に因れるも、是れ實に海外卑内の弊を矯めんとするに出づとの説ありて、附會するに和魂漢才の語を以せしは、亦當時の事情に適應せずんばあらず、支那交通一たび止んで、支那文學漸く衰へたりしが、鎌倉以來、禪宗の我邦に行はるゝや、高僧を彼土に求めしと、其の威儀一に支那風を學び、語疏の如きも亦支那語と駢體文とを用ふるより、支那崇拜の念甚だ盛にして、彼を呼ぶに皇元大明を以し、自體文とを用ふるより、支那崇拜の念甚だ盛にして、彼を呼ぶに皇元大明を以し、自ら粟散の島夷を以て居り、我國は吳秦伯の後なりと云ふ者あるに至り、其の手に成りし足利時代の外交文書の如き、失體言ふに忍びざる者あり、是れ室町の外交が、唯利是れ獲んとして、彼の歡心を失はざらんとせし爲なれば、未だ必しも獨り禪僧を咎む可らざるに似たれど、其の師僧たり、其の顧問たる地位に在りし禪僧の無識も、亦其の責を免る可らず、而して當時の儒學は、此の輩に因て斯る時節に研究せられしより、之を五山に承けて之を元和寛永に展開せし儒林の氣習は、亦往々支那崇拜の弊に陥りしを免れず、諺にも我佛尊しと云へり、吉田松陰曰く、書を讀んで聖賢に阿る勿れ、苟も阿ねる所あれば、則道明ならずと、儒者の弊、誠に聖

開書東瀛
と孔孟

孔孟の奴
隸

國學者輩
出

和學の盛
衰

賢に阿ねるに在り、或は傳ふ開書弟子に向つて、孔孟來りて我邦を攻めば、之を爲すこと如何んと問ひ、堅を被り銳を執りて孔孟と戰ふは、孔孟の道なりと諭せりと、東涯は曰く、小子愛ふる勿れ、世に此の事なしと、二人の學德機鋒を知るに足りて、いと面白き話なるが、孔孟來攻の問は兒戯に類するも、當時の學者に、殆んど孔孟の奴隸たりし弊習ありたればこそ、此の問は起りけめ、伊藤東涯に刊穆正俗の著あるも、人猶其の中華と稱するを詆り、物徂徠に國學辨翼の著ありて、國體を説くも、猶且つ我を貶して彼を尊びしを嫌ふ、況んや之より下れる者をや、是より先き釋契沖、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、伴信友、平田篤胤等相踵ぎて而して起り、國學是に於て盛なり、國學は所謂和學なり、古に和學の名目なく、儒生は彼我に通じ中外を貫ぬくを要す、堀河帝の時、大江匡房に和學得業問答あり、和學の名此に始まりしか、(村田春海の和學大概)既にして亂離相踵ぎ、國學漸く衰へて、纔に摺紳の家に傳はるも、十一を千百に存するのみ、曰く秘曰く訣、古賢の眞傳何くにか在る、或は蘊或は奧、今人の偽造是れ多し、(荷田春滿の創學校啓德川氏と爲りて、儒學は復興せしも、國學は未し、春滿之を慨き、學校を立て、皇國の學を講せんことを請

國學者の
學の辨異

國學者の
漢學水攻

稱呼の辨

ひしが、實行するを得ずして逝けり、蓋し契沖出で、古言明に、春滿繼起して歌學正しく、眞淵宣長等踵を接して輩出してより、古史舊書炳として、犀を燃すが如く、信友考證に長じ、篤胤論辯に長じ、國體を明にし、名分を正せり、而して此の諸老、皆初め儒學を修めて孔孟の道を學びし者なり、故に其が道德思想は、亦皆綱常彝倫の教に本きて、以て皇國の學を輔翼せしが、所謂國學の一派既に立ちて天下に標榜するや、盛んに佛徒の狡詐を攻撃し、又儒者の疵瑕を指摘して、其が支那風に溺れ、支那心に泥むを攻撃せり、篤胤一派の國學者に至りては、或は局量褊狹を免れずして、自尊自大の弊却て支那の讀書人に似たる者ありといへども、當時の漢學者も、亦國學者の攻撃を甘受すべき弊習ありて、其の反省に資せし者尠からず、而して稱謂稱呼の辨は起れり、一は外國に對する辭令の改善にして、自尊心を主とし、一は幕府に對する稱呼の矯正にして、尊王心を主とし、宣長の馭戎慨言の如き、留主友信の稱呼辨正の如き、尾藤二洲の稱謂私言の如き是なり、(大義名分漸く天下に明なり、是れ國學者の獨り美を擅にすべきに非ずして、程朱派の學者、水戸派の如き、尤も功を分つべき事實ありといへども、一般漢學者より言へば、國學の磨

他山の石
 瑛に負ふ所の者多し、豈他山の石に非ずや、之を要するに二者相對し相輔けて、以て集めて大成せるは、支那の學界に見るを得可らざる現象と謂ふべく、儒學の本家たる支那には、儒學殆んど亡びて、而して獨り孔孟の道を我邦に傳ふるは、實に萬世一系の國史を經と爲せる學風の賜なり、是れぞ徳川文學の特色にして又一
 徳川文學の特色
 大光彩なり。

(十二) 宋學一統の由來

上、學派四起

學派四起

學問源流の學派論

程高と陸王

關齋の新説

仁齋の古義

古の儒學は漢唐の註疏を墨守するのみ、宋學傳來して後は、其の研究専ら叢林に同せしが故に、性理の説に於て、禪學との比較研究と爲り、多少の趣味を生せしも、亦宋元僧の睡餘に過ぎず、徳川氏の世と爲りて、學術始て開け、風尚幾變して、元祿享保の際に至り、學派四に起れり。

那波魯堂の學問源流は、古來の學派を叙して源流を詳にせり、其の要に曰く、程窩の學正大なりと雖も、章句文義、猶未だ明ならざる者あり、當時陸象山(王陽明)の書早く已に傳へ來り、取て以て工夫の一助と爲せり、其の後四五十年間、小異同あるも、大抵程朱の學なり、萬治寛文の際、山崎嘉右衛門敬義出で、新説を立て、専ら四書近思錄を講じて、力を文章に用ひず、之を關齋派と云ふ、其の行はれし區域は十の三なり、貞享元祿の比に、伊藤源助仁齋新義を説きて、自ら古義堂と云ひ、語孟を宇宙第一の書と稱して、六經に及ばず、其の子源藏東涯家學を紹述し、朱子の復初

藤樹の王
三輪執齋

反正を低りて、擴充の功を尙べり、其の學は明の吳廷翰、斐記、橫記に本く、之を古義學又は堀河學と云ひ、盛んに世に行はれて十の七を占めたり、此に至りて元寛の學風は稀なり、是より先き寛永中、中江與右衛門藤樹王學を唱へ、其の徒に熊澤次郎八あり、後ち正徳中に至りて、京に三輪善藏執齋ありて王學を唱ふ、陽明は明の正徳中の人なるに、今又正徳中に起れるは、機縁の熟せるなりとて、從學の徒尠からず、然れども關齋東涯に比すれば寥々たり、元祿中、荻生總右衛門雙松あり、明の李王を慕ひて、古文辭を唱へ、程朱を譏りて當時の諸老を蔑視す、之を古學又は徂徠學と云ふ、世人之を慕ひて新異と爲し、享保の初年、専ら江戸に行はれ、後ち九州四國に及び、一世を風靡して、而して關齋東涯の學衰へ、元寛の學風は言出す人もなかりしが、寶曆比より稍徂徠の學を疑ふ人多し云々、遂に其の後の學風を評して、關齋にも非ず、東涯にも非ず、陸王の派を習ふは尙稀なり、程朱の學を習ふかと思ふに、必しも信じて習ふにも非ずと云へるは、豈折中學者などを指せしに非ざるか、折中學は漢唐宋明に偏せずして、中を折し善に従ふ者にして、片山兼山、井上金峨等に始まる、二子皆明和安永間に起りて天明に歿し、魯堂と時を同じくせり

徂徠の古
文辭學

折中學派

程朱學の
衰微

學問の進むに従ひて、新説の出るは自然の勢なり、新説の出るは亦學問の進歩なり、漢唐の註疏に甘んぜずして、宋明道義の學と爲り、高談空言の性理に慊たらずして、禮樂刑政の説と爲り、或は道學を指して迂腐と爲し、或は實學を指して功利と爲し、或は考据に長じ、或は漢宋を折中して、擇んで其の善に従ふ、皆互に相磨礱して道に進む所以なり、何ぞ必しも學派の歸一を要せん、但程朱派に在りては、盛衰の感如何ぞや、魯堂曰く、享保の初年、東涯の學専ら行はれ、其の間猶一二程朱の説を習ふあり、後徂徠の説行はるゝに至りては、程朱の説を習ふ人は、絶へてなきと云ふべし、程朱學派の衰や、此に至りて極まれりと謂ふべし、魯堂は惺窩門下四天王の一人なる活所五世の孫にして、程朱を奉じて正學と爲す者、深慨を學問源流の一書に寓して、門人小子を教導せしは、蓋し叔世の學風を挽回して、以て程朱派に歸せしめんことを望みしが爲なるべし、

綱吉將軍

程朱學の衰へしは、程朱學派に人なかりしが爲なり、羅山、鵝峯逝きて、林氏振はず、徒に學問を挾みて上流に據るのみ、綱吉將軍最も文學を好み、自ら經書を講じて、諸侯に聽かせたりし程にて、御板四書を初め、五經及び詩書易等、中小二種の彫刻

木下錦里
木門の盛

ありしも、此の代なるが、惺窩の孫弟子にして松永尺五の高足なる、木下錦里を擢用して文教の任を托せしより、文權は木門に歸し、新井白石、室鳩巢、相携へて幕辟に就き、白石は政治に參じ、鳩巢は教育に任せり、柴野栗山、錦里集に序して曰く、
盛矣哉、錦里先生門の人を得るや、大政に參謀するは、則ち源君美在中、室直清師禮、外國に應對するは、則ち兩森東伯陽、松浦儀禎卿、文章は、則ち祇園瑜伯玉、西山順泰、健甫、南部景衡、思聰、博該は、則ち神原玄輔、希翊、皆瑰奇絕倫の材なり、其の岡島達之至性、岡田文の謹厚、堀山輔の志操、向井三省の氣節、石原學魯の靜退も、亦得易からざる者にして、而して師禮の經術、在中の典刑は、實に曠古の偉器にして、一代の通儒なり。

吉宗將軍
の獎學

此等木門の才俊、散じて四方に在り、元祿享保の際、程朱派は猶官學に盛んにして、而して諸藩に行はれ、伊物二派と相對して、以て氣を吐き、盛を鳴らせり、而して時の八代將軍吉宗も文學を獎勵し、山井鼎編述、荻生觀徂、徂徠の弟補遺の七經孟子考、文補遺三十三本を刻して、之を支那に送り、以て彼の土の學者を驚かし、採書の令、官撰官刻の舉、相踵ぎて、而して起り、以て好書篤學の風を鼓し、文運の隆なる前を

異學の跋
尾

空しくして後を照せり、木門の諸老逝きて、而して室門の弟子、其の學を鼓吹せざるに非ざるも、強弩の末力、續を貫く能はざるを、奈何にせん、而して後程朱派の所謂異學の徒、勢力を得て、入主外奴の見を持ち、痛く程朱派を誣れり、曰く迂腐、曰く空疎、曰く固陋、寡聞、曰く頭巾の習氣、之を罵り、之を嘲る、所以の者、至らざる所なし、而して其の徒は曠達自ら喜び、才を銜ふて行を檢せず、夫の人の子を賊ふ者なきに非ず、謹厚にして忠愛なる程朱派の憤慨知るべく、程朱派にして一たび志を得ば、其の反動なきを欲するも得んや、反動は來れり、寛政の異學禁是なり。

中、樂翁の學政更張

柴野栗山拔擢せらる ▲西山拙齋の勸告

寛政の異學禁は、白河樂翁、松平越中守定信執政たりし時に、柴野栗山の意見に因て行はれたりき、今其の由來を尋ねん、

白河樂翁の執政と爲りしは、天明七年に在り、是より先き安藝の頼春水樂翁公に招かれ、坐を賜ひて學を論せしことあり、春水は夙に公の程朱を奉ずるを知りて、

頼春水
樂翁

爲に異學の源委を辨晰し、更に序一篇を作りて、公の白河に之くを送れり、其の文も亦學の正しからざる可らざるを論じ、方今學術稍變じ、議論卑陋なるに、志學の人、往々正を厭ひ詭を喜ぶは憂ふ可し、其の學正しからざれば、民は其の上を慢り、上は其の下を殘ひ、其の歸勝けて道ふ可らず、其の學正しければ、德業至盛至大なりと論じて、遂に綱常を扶植し、政教を鼓勵し、四方來りて法を取り、萬世の爲に太平を開くの大任を以て樂翁に望めり、此は天明四年の事にして、樂翁未だ執政たらざりし四年前なり、春水は年十八大阪に出て、混沌社の人々に交りしも、其の學術は片山北海等より得たるにもあらず、自ら洛閩の書を得て之を読み、信じて正學と爲し、初め徂徠學を修めし尾藤二洲に勸めて程朱派に歸せしめ、正學指掌の著あり、古賀精里が初め陸王の學を喜びしをも、二洲と共に勸めて程朱を奉せしめし程の程朱尊信家にして、學統論學統說などを作り、然れば樂翁其の説を聞き、夙に學風の矯正せざる可らざる所以を心に藏めしか。

樂翁の幕政を執るや、首として學政を振興せんと欲するも、最高學閥の林家は、鳳岡榴岡を経て鳳谷に至り、漸く衰頹に歸して、重を取るに足らず、且つ程朱派の正

春水と二洲精里

林家の衰頹

宗を以て自任すべき林門猶且つ學風の取難を免れず、而して昌平の儒官も亦員に備るのみ、復た一世の瞻望を維くに足る者なし、是に於て樂翁は錦里白石鳩巢等擢用の例を追ふて、人才を野に求めざるを得ず、或は云く、樂翁龜田鵬齋を薦學せんと欲して召して之を見る、鵬齋の社衿は紋を異にせり、樂翁怪しみ之を問ふ、鵬齋曰く、是れ柳原古衣舖に獲る者なりと、樂翁悦びざる色あり、鵬齋出で、人に語りて曰く、執政器小なりと、事遂に寢めりと、是れ恐らくは附會なるべし、鵬齋は折中派に出で、程朱派の異學と爲す者にして、樂翁の物色する所は、程朱派の學者なればなり、當時の程朱派は、人物寥寥、指數するに足らず、樂翁物色して而して柴野栗山を挙げしは、誠に其の人を得たり。

龜田鵬齋と樂翁

柴野栗山

栗山の論學弊

論語の解二十餘家

栗山阿波の人、初め鳩巢門下の中村蘭林に學び、後ち林門に入りて贊を榴岡に執り、獨り經學に精しきのみならず、亦文章を能くし、才あり識あり、眞に鉅匠たり、而して程朱を尊信して異學の跳梁を惡めり、其が論學弊の一篇は、近來新説を立つる者、或は舊學の固陋を厭ひ、或は古説の窒礙に苦み、或は尊大自ら居り、或は怠惰自ら便にするに出づと爲し、日新月異、怪妄訛誕にして、論語の解二十餘家あるに

至り、道術無紀の甚しき、之を言へば心を傷ましむと憤慨し、答大江尹の書には、源に遡りて流を窮め、以て學變を論じたり、其の程朱の書は、正元中に來貢し、垂水氏に擊まると云ふ者は、誤りて替者玄信の妄説を信する者にして、天下の學柄、皆髡徒の手に入り、吾道滅絶に幾しと云ふ者も、亦儒者の通弊なりと雖も、其の諸儒を月旦する者、媚々聽く可し、曰く、惺窩羅山は博洽精識、一時の唱首たり、但時猶草昧、人文未だ開けず、其の文辭に於ける、未だ人意に厭かざる者あり、曰く、山崎木下二氏、皆豪傑の士、出處觀る可き者あり、曰く、山崎の流は、三宅淺見の諸家と爲り、或は剛復褊滯、自ら許すこと甚だ過ぎ、人を責むること刻薄なり、曰く、木下氏の派、分れて新井室雨森祇園の諸家と爲り、其の弊は浮靡に流るゝ者あり、而して室鳩巢尤も粹にして、制行文章、經世の才、信に通儒全科と稱すと、遂に伊物に論及して曰く。

梁山の仁

中世伊藤源助なる者、其の性惡高遠微妙の言を出し、其の好む所は、則平實卑近、又時流剛復褊滯高談自ら許す者の爲を厭ひ、凡そ古書の天道性命を説く者、易中庸より擧げて而して之を斥く、(中略)其の驕傲不遜、其れ之を何とか謂

梁山の仁

はん、然れども源助の爲す所は、譽を要め名を干めんが爲にする者に非ず、其の實は疑ふ所と厭ふ所とあるに出づ、猶恕す可き者あり、繼ぎて而して物茂卿なる者出づ、其の悟入する所は、則舌人譯學の緒餘なり、其の安心立命する所は、則王李古文辭の遺窩なり、其の性倨傲勝を好み、既に源助に先著せられ、古説を循守して宋儒を尊奉せんは、乃ち愚癡無能、一家の宗師と爲る可らずして、而して源助の下に出づる者に似たりと謂ひて、遂に牽強傳會鑿空撰出し、其の糝屎乖刺無稽の言、大に天下に禍せり、其の徒太宰純なる者、反て其の師を噬み、又自ら説を成し、此より其の後、虚驕風を成し、天下狂するが如く、甚しき者は聖經敬するに足らず、古人博物文章德行、皆信するに足らずと爲す者あり、(中略)是れ其の偏を作る者は、源助を罪首と爲す、(中略)宋人の約束を奉ずる者、迂腐笨蠢、疑の如く、甚の如く、愚夫愚婦の口逆親鸞の誑誣を受くるが如きか、而して今の宋儒を議する者は、則皆聰明敏達豪傑曠世の人か、(中略)夫れ所謂學と云ふ者は、何ぞや、將た以て中國聖人の道を學ばんとするに非ざるか、中國聖人の道を學ばんと欲せば、則中國聖人の傳を學ぶ者の正且つ信

仁齋は那

梁山の木

なるに若く莫し、故に彦は人に禁じて我邦諸儒の書を讀ましめず、(中略)日に宋人の律に循ひ、之を兩漢に徵し、廣く歴史百史の書を以て之を身に反し、之を物に驗し、積むに歲月を以せば、則古聖賢の遺意を得るに庶幾し云々。

栗山の論は過酷

新說傳見功名心

伊物の功

栗山の國家上書と伊物

栗山は當時の雜學を排し、程朱を護せんと欲して、而して伊物二氏を責む、立言の勢、然らざるを得ずと雖も、其の言や酷に過ぎて通論に非ず、學者の新說を立て僻案を持つるは、賊に倨傲勝を好むの功名心に出て、往々已むを得ざるの辯に非ざる者あり、然れども伊物二氏の如きは、我邦儒學の功臣なり、我邦の學者若し宋儒是れ奉じて、固陋自ら安んぜば、則或は剛愎褊狹に過ぎ、或は空疏迂濶に陥り、遂に將に沉滯衰敝救ふ可らざるに至らんとす、幸に伊物二氏あり、其の間に出で、而して學海を震盪し、以て波濤を捲き起せしより、活氣を儒林に與へて、沉滯の病を救ひ、衰頹の弊を振ひて、以て學風の變又變を致して、進歩の氣運を開くを得たり、(後ち栗山將軍の侍讀と爲りし時、國字上書を上りしが、文中徂徠の政談を引きて用ふ可しと爲し、眞の學問を爲せるは、伊藤源助、山崎嘉右衛門、中江與右衛門等なりと云へり、責任ある地位に立ちては、見識も公平と爲りしなるべし、且つ彼我の

日本の儒學を成すべし
程朱派の偏狹

注文通の人物

栗山福川

國體既に異なる時は、經籍の見解も亦必しも彼に泥むを要せず、取るべきは則取り、舍つべきは則ち捨て、以て一種の日本的儒學を成すも亦可なり、則ち本邦諸儒の經解を禁じて、一切之を讀ましめざるは、亦程朱學者の褊狹にして、決して公論に非ず、中國聖人の道を學ばんと欲せば、中國聖人の傳を學ぶ者の正且信なるに若かずと爲す者、猶未だ尊外卑内の儒弊を脱せざる者あり、然れども樂翁幕政を執りて、先づ學政を振興せんと欲し、人物を家康以來幕學の宗旨と爲せる程朱派の學者に求めて、日に宋人の律に循ひて聖賢の遺意を得べしと爲せる栗山を林門に得たるは、豈注文通に適せし者に非ずや。

栗山の幕辟に就きしは、樂翁出頭の翌年なる天明八年なり、室鳩巢が正徳三年に召出されし後、未だ嘗て儒生の拔擢あらず、此に至りて七十六年を経つ、學者傳聞して以て榮と爲し、中にも程朱派は我黨の勢力挽回を豫期して、其の人を得たるを賀せり、而して先づ書を栗山に寄せて異學を禁せんことを勸めし者は、彼の那波魯堂が高弟なる西山拙齋なり、其文に曰く。

答客問

◎宋學二統の由来

四山拙齋
が栗山に
勤めし書

客問於余曰、頃聞公朝新政、海宇更化、白川侯爲輔相、總揆席、首徵栗山先生于京畿、蓋特恩也、夫三都中、稱鉅儒者何限、而朝議獨擢先生、豈徒哉、先生所以報朝恩者、當奚先、吾子知其說乎、余對曰、吾儕小人、何足以知焉、雖然、管窺蠡測、請試妄言之、子其妄聽之、程叔子有言曰、道不行、百世無善治、學不傳、千載無真儒、無真儒、則天下習々焉、莫知所之、人欲肆而天理滅矣、從是觀之、行道天下、亨育兆黎者、宰輔之責也、傳學萬世、翊贊道化者、大儒之任也、爲先生者、宜脩學、制整學統、勿使異言邪說、充塞仁義、此其先務也、歟、方今海內之學、四分五裂、各自建門戶、胥失統歸久矣、有黜六經、廢學庸岐、堯舜孔子爲二致者、有外性理、混王霸、蔑視思孟、程朱者、有陽儒陰佛、妄唱心學者、有稱神道而薄湯武者、或枯單說道、或雜博論學、或抵掌談經濟、或抗顏聘詞壇、唯新奇是競、異言百出、迭相驅扇、動輒著書、銜世、以此自欺々人、釣名罔利、遺毒後昆、寔繁有徒、青衿子弟、俱々焉、無所適從、遂與吠聲、不陷於此、必溺於彼、滔々者、天下皆是、噫、學之失統、未有甚於此時者也、孟子曰、生於其心、害於其政、發於其事、異學之害至此、可不畏且戒乎、故孟子又曰、君子反經而已矣、經正則庶民興、庶民興、斯無邪慝矣、又曰、能言距楊墨者、聖人之徒也、今欲

拙齋栗山

脩學政、整學統、宜先申明倫理、刮靡節行、以抑奔競、警浮華、雖然、不塞不流、不止不行、又宜建白于朝、嚴禁異學、峻絕邪說、著之令、行之郡國、則海內從學者、必將幡然改圖、翕然擗方矣、而後建學立師、作新斯民、博約培達、以成其材、庶乎聖學可復興也、眞儒可繼出也、學以從政、亦可以贊善治之化、可以鳴泰運之盛矣、況今賢相秉鈞于廊堂、眞儒振鐸於黉官、其關異也、如拉朽、其反正也、如運掌、莫之能禦、惟此時爲然、蓋朝廷之所以求於先生、先生之所以報於朝廷、其唯在于斯乎、其唯在于斯乎、若夫遷延願望、不以道學自任、旅進旅退、坐失時機、不惟非先生進仕之素志、豈亦朝廷擢用之盛意乎、言未畢、客唯々而退、因乃次第其語、敢獻之先生以問焉、拙齋は別に一書牘を添えたるが、其の書牘に據れば、拙齋栗山と別來六七年を経たりし寛政元年、即ち栗山就辟の翌年に、相山生の書を得て、栗山が昌平教官の命を拜せしを聞き、吾道の福なりと爲して、此の文を贈りし者なり、拙齋は備中の人、初め醫を古林氏に學び、後ち播人岡孚齋に從游し、孚齋歿して後、其の外孫なる那波魯堂に京師に學べり、人と爲り嚴正にして峻厲、程朱派以外の學派を視ること仇讐の如し、栗山は才子なり、而して人に交るにも圭角なかりしと見え、其の異學

栗山と洪
國清洲

を恐むこと如此く甚しと雖も、京に在りて交る所の人は、僻案自ら喜べる皆川洪、
國折中派の赤松滄洲等にして、吟社を三白と稱せり、其の學説を同じくせざるも、
意氣投合する者ありけん、一たび志を得るや、一命を借りて壓迫を異學の徒に加
へしは、其の所信を實行する者なるを疑はざるも、亦其の交朋の期待甚だ殷んな
りしにも因るなるべし。

交朋の期
待

下、異學禁と其の結果

岡田寒泉

樂翁已に栗山を拔擢し、更に岡田寒泉を擢んで、儒員と爲せり、寒泉は幕臣にし
て、崎門派の村士淡齋に學びし人なり、羽翼既に成る、以て施設すべし、寛政二年五
月を以て、學界を震動せる異學の禁令は、當時の最高學閥なる林家に下れり、其の
文に曰く、

林大學頭へ

異學禁の
令

朱學の儀は、慶長以來、御代々御信用の事にて、已に其方代々右學風維持の事
被仰付候得者、無油斷正學相勵、門人共取立可申候處、近頃種々新規の説を爲

し、異學流行、風俗を破候類有之、全く正學衰微の故に候哉、甚不相濟事に候、其
方門人共の内にも、右體學術純正ならざるもの、折節有之様相聞如何に候、此
度聖堂取締嚴重被仰付、柴野彦助、岡田清助儀、右御用被仰付候事に候得ば、能
能此旨申談、急度門人共異學相禁、猶又不限自門他門、申合正學講究致、人材取
立候様、相心掛可申候。

程朱學の
二大派
京學と東
學

蓋し元寛以來の程朱學は、分れて二大派と爲れり、一は京都に行はるゝ者にして、
之を京學と稱すべく、一は江戸に行はるゝ者にして、之を東學とも稱す可し、京學
は能く自ら活せざるを得ざりしより、門戸を大にし、標榜を高くして、或は術氣に
嫌ふも、依附する所なきが故に、能く思想の獨立を保ちて、尊王の氣風を帯び、東學
は幕府に依附して、功名榮達を希ふが故に、常に其の意を迎へて、覇業の羽翼と爲
れり、是れ家康の程朱派を引き、文權を關東に併收せし、貽謀に本づくなるべし、
而して今樂翁の此の擧に出でし所以の者は、亦其の貽謀を奉じて、覇業の羽翼を
助長し、官學の威信を恢復せんと欲する者たり、則ち彼の栗山なる者、徒に榮達を
慕ひて幕府の爪牙たるに甘んじたりしか、論者、尼利衍氏の異學顛末、或は謂く、異

家康の貽
謀

京都思潮
江戶思潮

學禁は實に京都思潮と江戶思潮との衝突なり、京都思潮を代表せる栗山は、官學の權力を利用して、江戶思潮を撲滅せし者なり、江戶人をして尊王の大義を知らしめし者は、栗山等の力なりと、想ふに栗山は實に東學の産兒なり、然れども其の京に住するに及びては、王室の式微を目撃して、尊王の心は油然として中に生ぜしならん、皆川淇園と清和門外を歩して、南院の桂香に打たれ、月下に常御殿より洩れ來れる笛聲を聞きて詩を賦せしが如き、神魂の那邊に葵傾せしやは知り難からず、其餘栗山文集中の文字、往々尊王の誠を見るべき者あり、則ち栗山や已に京都思潮の渦中に在り、樂翁の之を用ひしは、霸業を羽翼する所以なりしも、栗山の辟に就きしは、尊王主義を納るゝに隔よりせんとする本意なりけん、然れども異學禁を以て直に江戶思潮の撲滅と爲すは、恐らくは誤れり、如何となれば、霸業の羽翼たる東學は、異學に非ずして、幕府に依附せる程朱派なればなり、栗山の尊王主義を行はんが爲に、霸業の羽翼たる程朱派を助長せりと爲すは、大なる矛盾なればなり、論者は又家康の程朱派を尙びし所以を論じて、朱子學は君臣の大義を鼓舞せるより、其の學者を江戶に召して、京都に其の學を絶ち、關東人民を教

栗山の尊王

徳川氏と程朱派

導して君臣關係を牢固ならしめ、以て自家の安全を永遠に保たんが爲なりと爲せり、家康の狡謀其れ或は然らん、故に幕府の宗とする所は、霸業を羽翼すべき程朱派にして、尊王主義の程朱派に非ず、程朱の學と雖も、霸業を羽翼せずして、尊王主義を鼓吹する者は、幕府の視て以て異學の徒と爲す者なり、寛文六年に山鹿素行を綱して、聖學要録を絶板せしは、異學禁の始なるが、是れ其の罪名を異學に托するも、素行の學派漸く盛なるを忌み、或は尊王の主義を鼓吹して、慶安太平記の貳舞を演せんことを恐れしに出づ、程朱派の罪を得し一證なり、寶曆中に竹内式部を逐ひ且つ謫して、有志の公卿を禁錮し、桃園天皇の神典講筵をさへ停めたりしは、崎門の學が尊王の主義を激勵して、承久正中の大難を再發せんことを恐るゝに出づ、次篇の王政維新と宋學參看程朱派の罪を得し二證なり、栗山若し尊王の大義を扶みて、霸業の羽翼を助長せんことを望める樂翁の薦に應じ、尊王主義の程朱學を振興せんが爲に、異學を禁じたらんには、攻撃は五鬼に出でずして、大老老中の包圍と爲り、以て素行式部の覆轍を履まんのみ、然らば則ち栗山が異學禁を樂翁に勧めし所以の者は何ぞや、予の所見を以すれば、一には學派上の所信よ

山鹿素行禁錮

竹内式部斬らる

異學の
由來

り來り、一には幕府の信を買はんとする權宜に出づ、栗山程朱を信じて正學と爲し、伊物の弊漸く甚しく、遂に風俗を壞り、夫の人の子を賊ふを見ては、夙に志を得ば異學を禁せん、の抱負ありしなるべく、其の幕辟に就くや、同志の士鬪望甚だ殷なり、彼れ豈此の一擧なきを得んや、而して宋儒を詆り程朱派を罵りて、才を銜ひ行なかりし異學の徒が、此の一大壓迫を蒙りしは、亦當然の反動なり、栗山既に京都思潮の渦中に在りて、尊王の志を抱くも、式部の覆轍は、僅々二十餘年の前に在り、知己の樂翁賢明なりといへども、其の己を擢て、學を興さんとする本意は、幕府の威信を立て、覇業の羽翼を養ふに在る以上、忠實なる奉公振の以て信を取る者なかる可らず、是を以て幕府の意を迎へて異學の禁を發し、多數學者の攻撃を甘受して、程朱學の復興を謀れり、而して徐に幕府をして恭順の誠を致さしめんとせり、栗山時代の思想を以て、當時の状態を回顧すれば、栗山讃岐の野人より出で、幕府の儒官と爲るが如き、無上の光榮と謂ふ可く、幕府に對して疎略あらん様なし、然れば栗山の文を讀むに、幕府に對する稱呼も恭に過ぎたる者あり、故に召出されし當初より、幕府をして尊王主義を行はしめんとし、又は程朱學を振

栗山の
敬

栗山の尊
王賢
栗山の才
味見

に興して京都思潮を注入せんとする初志ありしやは、頗る疑問に關するも、其の後内裏の造營と云ひ、山陵の調査と云ひ、幕府が王室を尊崇せし所以の者、亦栗山の翼賛に出る者あるべきを思へば、斯くの如く觀察せんこそ、先賢の美を成す所以なれ、異學禁の由來、果して斯くの如くなりけんには、栗山才あり識あり、大義を辨へて而して權略に富めりと謂ふ可し。

異學の
大打撃

俗儒の無
定見

異學の禁一たび出るや、程朱派以外の學者は、皆忽ち一大打撃を被れり、師を擇び學に就かんとする青年子弟は、學者の門を叩きて、先づ學派の如何を問へり、程朱學者なれば則ち贊を執り、程朱學派に非ざれば、則執政の旨に忤ふとて辭し去れり、是を以て自信なき俗儒は、往々故學を棄て、新註を講じ、以て徒を招き業を傳らんことを伴ひしも、名ある學者に至りては、腕を扼して憤り、書を上りて抗論し、物議頗る騷然たり、當時異學の錚々たる者も亦多し、江戸に市川鶴鳴、山本北山、冢田大峰、豊島豊洲、龜田鵬齋等あり、尤も反抗に力めしより、世之を五鬼と稱す、(程朱派より名けし者ならん京都に皆川洪園、岩垣龍溪、村瀬栲亭、佐野山陰等あり、世之を京師の四大家と稱す、其の他播州に赤松滄洲あり、奥羽に松川東山あり、浪華に

五鬼の反
抗

異學の
諸儒

冢田大峰の上書

片山北海あり、尾張に細井平洲あり、九州に龜井南冥あり、江戸に伊東藍田、古屋昔陽あり、或は栗山と舊交あるを以て、或は塵外に超然たるを以て、起ちて而して之を争はざる者ありしも、皆中に憤りて其の非を論せざる者なし、先づ書を執政に上りしは、山本北山、冢田大峰の二人なり、北山の書は予れ之を見ず、大峰の上書は俗文にして、學問に流派あるは、弓馬槍劍にも流派あると同じきを論じ、何の流派にても、孝悌忠信を教へ、治國平天下を講ずるは、皆其の歸を一にするを説き、元寛草昧の際は、學文未だ開けざりしを以て、朱子學を用ひられしも、今日に至りては學派に拘る可らざるを述べて、滔々二千數百言に及べるが、執政報せず、因て再び漢文の書を上りしも省みられざりき、西國にては赤松滄洲書を栗山に與へて、學に異同あるも正邪なきを説き、宋儒の弊を論じて、宋學の獨り正學に非ざるを辨じたりしも、栗山は舊交を傷けんことを恐れたりしにや、與に争はず、彼の異學禁を栗山に勸めたりし西山拙齋は、好んで自ら栗山に代り、書を滄洲に與へて之を駁せり、其の陸王伊物を罵りて異端邪説と爲せるは、褊狹なる朱子學者の本色を示す者にして、猶法華僧が他宗を罵りて、念佛無間禪天魔真言亡國律國賊と云へ

西山拙齋の反駁

赤松滄洲の論争

朱子學者と法華僧

學派の一偉觀

異學を道

龜井南冥の憤死

寛政の三博士

春水海門の昌平山

るが如く、明清の科擧に程朱を標準と爲すを引きて、洛閩に歸一せざる可らざるを説けるも、亦未だ人を服するに足らず、要するに異學派が學説の自由思想の獨立を尙べるは、頗る進歩せる見解にして、程朱派は官權を借りて自派の勢力を伸べんとする者の如く、頗る厭ふ可きに似たれども、兩派の論争は、文之恭畏の論戰以來、未だ曾て有らざりし學界の一偉觀なり、而して程朱派は遂に勝てり、否、幕府の權威を借りて異學を壓伏せり、異學禁は單に林氏に下りしに過ぎざるも、幕旨を迎合せる各藩の藩學は、皆宋學に歸一し、其の然らざる者は圖を改め故を棄てて、新に程朱學派を奉じたり、是に於て異學の被れる迫害尤甚しく、遂に筑前藩學の甘棠館に據りて雄を九州に稱せし龜井南冥をして、陽狂憤死せしむるに至れり、亦慘ならずや。

栗山既に學政一新の策を定め、更に尾藤二洲、古賀精里を擧げて、昌平の儒官と爲せり、之を寛政の三博士と稱せり、既にして栗山は將軍の侍讀に轉じ、學政は之を二洲、精里に譲りしが、尋ぎて安藝の藩儒頼春水、薩摩の藩儒赤崎海門に命じて、經を昌平學に講せしめしは、學者の特典にして、西山拙齋も亦擢用せられんとせし

も辭して就かざりき、初め樂翁之を用ひんとせしも、栗山其の高風清節を説きて事止みしが、寛政八年、樂翁の儒臣廣瀬蒙齋、二洲の書を携へて拙齋を訪ひしは、拙用の内意を傳へしにや、拙齋此の時書を作りて出處を論じ、舊識の諸博士に贈れり、斯く内外呼應して、程朱學の復興に努力せしかば、幕學の盛なる、元祿享保に繼ぎて、而して大小各藩、亦皆新に藩學を創設するあり、此に始て宋學一統の教育と爲り、春秋釋奠、禮樂洋洋たりき。

宋學一統の教育

異學禁の弊

異學禁の弊は、唯程朱の説を是れ守りて、異説を立つるを許さず、思想の自由を拘束して、學術の發達を妨げしこと一なり、人を一定の規矩に驅りて、曲謹の風を養ひ、豪邁の氣を消し、人の天稟器度に隨て教養すべき人材の成就を妨げしこと二なり、此は先輩已に之を論じて餘蘊なし、予れ復た絮説せず、宋學一統の明效は、才を銜ひて行を檢せざりし浮華輕佻の弊風を改めて、眞摯篤實の風を養ひ、名分を辨じ、氣節を尙びて、栗山等が豫期せざりけんと思しき程に、京都思湖即ち尊王主義の勃興を促し、遂に王政維新の基を開けり、然れば此の異學禁は、幕府の希望したりし如く、一時は其の威信を收めたりと雖も、家康以來獎勵したりし程朱派に

宋學一統の明效

因て幕府を倒せしは、爾に出づる者の爾に反る習とや謂はん。

林述齋

侗菴茶溪

一齋良齋

安政の三博士

中村敬宇

宋學の令馳ふ

昌平人才の盛

因に記す其の後林家は、奥州岩村城主松平能登守の次公子に因て相續せられし者、即ち林述齋にして、才學識度、父祖に卓絶して、撰著甚だ多く、宋學一統後の海内各藩學より、一代の儒宗と仰がれ、以て先業を恢宏し、官學を更張せしが、精里の子侗菴、侗菴の子茶溪、並に三世の儒家として、博覽卓識、亦其の父に超えたり、述齋の門に佐藤一齋あり、大阪の中井竹山に受けて、陰に王學を奉じたりしも、猶陽に幕學の宗旨を失はず、一齋の門に安積良齋あり、亦昌平の教鞭を執りしが、文章の盛は、漸く經學に優れり、降りて安政中に至りては、鹽谷宕陰、安井息軒、芳野金陵の三氏、一時並に擢んでられて、昌平學に入れり、之を安政の三博士と謂ふ、宕陰力を史學に用ひ、息軒功を經學に積み、並に文章を以て一世に雄視せり、昌平に内外二寮あり、内寮は旗下の子弟にして、猶宋學を循守し、中村敬宇の如き大儒を出せしが、外寮は各藩の俊秀を收容する者、此に至りて經を談するに漢唐折中に入して、宋學一統の令漸く馳ふるを致せり、以て幕威の衰を證すべし、人才の昌平に集れるは、當時より盛なる莫く、尊王斥朝の論は、幕學の眞只中に湧き、後ち皆國事に奔

走して、或は難に殉し、或は功業を立て、而して王室中興の業成り、明治の文化は、亦個中より出でし碩學鴻儒に因て翼賛せられたりき。

附 載

栗山國字上書の一節

人別帳道切手は、唯今に御座候得共、唯今の通にては、何の用にも相立不申候。此致方は、**荻生惣右衛門**と申者の政談と申書に書記御座候、**大抵惣右衛門申候通にて宜く可有御座候と奉存候云々。**

有徳院様天下の御政務に、段々と御苦勞被爲游、林大内記を被爲召、古の事共御尋被爲游、其外室新助被仰付、貞觀政要と申書の講釋をも御聞被爲游、また紀伊殿御内高瀬奇朴と申者、四書の和解を被仰付、柳澤甲斐守家來、**荻生惣右衛門**と申者へ、大明律と申書の和解を被仰付、皆上覽に相備申候よし云々。人君の本道の御學文と申は、先有徳院様、水戸中納言源義公殿、保科肥後守正之、備前の松平新太郎光政の様に被游候事にて御座候、下に學者は大勢御座

栗山の英學語彙

大峰の英學抗論

候得共、此筋をよく吞込候者は、餘り多くは無之者にて御座候、先づ新井筑後守、室新助、熊澤次郎八備前、新太郎家來にて御座候、山崎嘉右衛門、保科肥後守家來にて御座候、伊藤源助、同源藏、兩人とも京都浪人に御座候、中江與左衛門、近江の浪人にて居申候熊澤次郎八師匠にて御座候、**杯申様の者にて御座候。**

冢田大峰の上書

寛政二年戊戌六月學問之儀被仰出候時分内々愚存之趣相認之書付。

儒者塚田多門乍恐申上度奉存候、文武之兩道者、士たる者の當職に御座候て、人々本より修行怠慢仕間敷事に御座候處、殊更近年格別之嚴命被下候より、天下之士彌無油斷相勵候風俗に相成、**扱々難有御儀に奉存候、右に付誠に愚陋之私式之者、申上候も奉恐入儀御座候へ共、私儀二十年餘も御府内に儒業相立罷在候て、諸侯方御旗本衆并諸家之士人へ、往々廣く切瑳仕候得者、唯今之御時節柄に、若くは一官衆官引之教道、**杯仕候ては、實に以て國恩に相背候程も萬々恐入奉存候得者、彌出精仕候て、聊免忽之教導等不仕様にと戒慎仕****

候儀に御座候、依て乍恐愚存之趣一通り御執政之御方之御聞に入申度奉存候、凡文は治を敷く道にして、武は亂を止る道なる事は、衆人も知る所に御座候、而文道は詩書禮樂の效法を以て、天下之人に孝悌忠信を勸るに過べからず、武道は弓馬劍槍の械器を以て、天下之不忠不孝之者を懲すに過べからざる道に御座候、而弓は發に引て發つより外なく、馬は引とゆるすとの外なく、劍は擊より外なく、鎗は突より外あるまじき術と被存候、往古弓馬劍槍共に流派有りし沙汰も不承候得共、中比より其人々の會得仕候場を以て、程々の流儀と申事出來候、而弓劍の術にて申上候半に、御流儀之小笠原流之弓術柳生流之兵法の外にも、當時弓は竹林流多く、諸侯の家にて吉田大藏雪落日置流、杯之古流も有之、兵法は常流新當流新影武藏流關口ト傳無敵無眼一刀流等之餘多之流御座候て、何れの流儀にても上手名人にだに御座候へば、皆御用に可相立御事かと被存候、且自然只今の世にも、弓は八幡太郎鎮西八郎とも可申、兵法は義經正成とも可申程の名人御座候は、本より流派之御尋なく、御用に可相成事歟と奉存候、依之愚案に奉存候は、文武には勿論元來流派

と申事は無御座候間、堯舜三代之道を本と仕候、而聖人孔子の教法を以て、孝悌忠信仁義を導き、天下國家を治むるよりは無御座御事に御座候得共、戰國秦漢より以來、其道を學候者の見識程々に違候、而各自分々の會得仕候所を以て言を立て書を著し候者、歷世に多有之候より、後世に至ては學問にも程々流派の名目出來候、而是非得失之議論しき事に罷成申候、本より聖人の道に流派の分るべき道理は無御座候得者、たとへ唯今流派を唱へ候學問にても、何れにも人々に孝悌忠信を教導仕候て、天下國家を治るに過たる教は有御座間敷、誠恐ながら東照宮御一統被游候比迄は、年久しく打續き戰國に御座候て、天下皆干戈の中に御座候故、文道の心掛有之候諸侯大夫士も、深く學問修行の間も無御座御時節に候之所、其比宋之程朱之學度り候、砌に御座候て、慳窩道春相傳へ、能く其教を學び得てより、林道春被召出、御用ひに罷成、林家被相立候より、御學問の御流儀は程朱之様に相成候得共、昇平之御恩澤周く四海に流れ候御代に罷成候より、天下之諸侯大夫も、各位祿に安堵致し候て、學問修行も仕候に依て、前來久敷埋れ居候古書なども、追々世上に現

れ出候て、五六十年來は學問仕者程朱之書之外弘く漢魏以上之古き書籍に渡り候て、講習仕候者も多有之、其内にて又々其學者之見識を以て、劍槍之流派の如くに、學問にも孝悌忠信仁義之道に誘引仕候者御座候は、何流にても世上に大勢有之候程、太平之御政務之萬分之一之御益にも可相成事に候半歟と奉存候、古者儒學計にても無御座、醫術なども醫和扁鵲之比には流儀も無御座候所、漢魏以來追々方法之書著述いたし候者多有之、療治方種々に別れ候故、後世之醫師は多く偏に宋元之間之醫書にのみ依て療治行ひし所、近世は山脇道作香川太冲吉益周助など、申上手なる醫出候て、漢魏之比之方法に因て、療治方夫々に發明仕候により、唯今に及び候ては、醫學と申候へば、傷寒論金匱要略外壺秘要千金方など、申古き醫書を第一に學び候哉に相成候、是もたとへ何れの流にても人の疾病をだに能療治いたし候は、古今之嫌は有之間敷事に奉存候、昔より大平之世續候時分は、何事も古き道興り候例に御座候て、漢の高祖之一統致されし時には、學者と申者も世に少く、書籍を流布不仕候處、其後漸々其所彼所より古書顯はれ出候て、名高き學者

も出來、聖人之道又々世に弘まり、漢より打續き唯今迄も學問之道傳り候事に御座候、且狂夫之言をも聖人は擇び用られ、芻蕘の賤しき者迄にも問ひ詢ると承り候へば、況や學者たる者の申せし事に候は、何れの流派と申事なく、古今之說之得失を撰び、何れも取用ひらるべき御事に可有御座候、又人は其氣質の近き所によりて、各好む所同じからざる者に御座候へ者、弓馬劍槍等の術も、人々の好にまかせて修行可仕事に御座候得者、學問も必程朱の流儀に無御座候とも、其人々の好にまかせ度ものと奉存候、佛者の宗派を以て比況仕候に、御當家之御寺は、三河以來淨土宗に御座候所、東叡山御建立御座候て、其後は御代々上野増上寺之兩御寺へ被爲入候事に相成申候、依之奉恭察候に、其時節に程朱之學流に無御座候共、若し聖人之道を能く會得仕候て道春に劣らざる才徳高き學者有之候はば、乍恐寛仁大度之神慮を以て、流派之御嫌なく、御用ひ可被遊御儀に御座候半歟、竊に奉承知候御儀に、本朝博士家之經學は、古來より漢魏之の註本に相定候所、林道春京都に於て初て朱子集註の論語を講釋有之候へは、朝廷より神祖へ御沙汰に被及候所、其時節に

道春程の者も外に相見得不申候へば、其儘に差置相用候とも苦しかる間敷之旨御答に被及候由乍恐奉承知候御儀に御座候、左候へば唯今之時節にても、能く士大夫を誘引仕候て、忠孝仁義之道に導き、其人材を教育仕候學問に、だに御座候は、何れの流派と申御撰なく、廣く人々の信する所の學者に隨て文道修行致し候様に公命被下度事歟と奉存候、右之段申上度譯は私學問之儀、亡父塚田善助、名は行宜、字は敬美、號は旭嶺と申者、幼少より御儒者室新助殿へ隨身仕罷在候て、儒業相立候へ者、私事も幼年より程朱之教を學候所、其後昇平之御徳宇之下に年來徘徊仕候て、外に師道と申者も無御座、只廣く古今之學者之教方を彼是見聞仕候内に、たま／＼經義等會得仕候外覺へ候儀無御座候得共、恐不肖之私に於ては、流派を建候事は何とやら本意に無御座候様に奉存候故、隨學之人々へ教道仕候には、何之學派と申事無御座、唯聖經賢傳之教を以て、直に忠孝仁義の則を諭し、臣子たる者の日用取候て、近く益ある様に致度心得にて教導仕候事に御座候、然る處近比は御旗本衆杯に私方へ入學致度由申込有之候衆中も、先づ學派被尋候て、朱子學に無御座候

異學後
の子弟

は、他流之學は越中守殿御嫌に御座候様子之沙汰に御座候て、遠慮致候衆も有之候儀に相聞得申候、勿論御執政之御方に、右體之偏怙之思召は有御座間敷御事歟と奉存候得共、何れにも右體之取沙汰に御座候ては、學問も所詮は諂諛阿順之事に罷成可申哉、世俗之諺に我佛尊しと申事御座候て、各其最初より信する所の道を改め候事は極て難き儀に御座候得共、然其常人は兎角諂諛之心免されざるものに御座候得者、貨財之賄賂行はれざる時節には、又何事にて御執政之御好と存候事をば、我心中にて信せざる事にも、面を易て阿順いたし候者も可有御座歟、左様に相成候ては、節角難有御世話被遊候ても、文道之實義忠信之道思召之儘に被行兼可申哉と奉存候故、誠非分不敬之罪を不願、此段御聞に入申度奉存候、恐惶謹言

寛政二年庚戌六月

冢田大峰儒學辨抄錄

古之所謂儒也者、師孔子、而學二帝三王之道者也、今之所謂儒也者、師朱子、而學

茂叔二程之術者也。古之所謂學也者，講治國安民者也。今之所謂學也者，索性理心法者也。夫性理心法之爲術也，偏在乎斷欲去私，以致虛靈知覺矣。其術源出於釋氏，釋氏之教，性理心法盡焉。帝王之治國安民，其道不敢闢乎是矣。

赤松滄洲與柴野栗山書

淵焉久矣，乃擬修候，而慮局務無閒，更煩手教。是以去秋奉呈小詩，亦不敢附上隻字。聊述相思之切而已。伏惟文侯佳勝，慶幸曷堪。鴻不佞春來疎狂如故，東山西溯，曳藜寬步，觀花鳥弄烟霞。除風雨外，率無虛日。追念昔時之同遊，感來興盡，悵然而還。一日會今枝生，問足下消息。生乃語曰：去秋有貴恙，且門生京客更病勞心，可想而天相吉人。今則霍然可喜也。而傳得豚犬勳也書，有云云。因審勳止嘉亨，渴望頓楹，恭喜雀躍。鴻不佞客歲以來，有所聞乃思，欲以國字書具陳區區，亦復恐勞賢慮而妨機務，乃止焉。近有人自江戶至，來見愚老，談論移時，乃語曰：柴博士彥輔奉徵命而東也。上自士大夫，下至匹夫庶人，苟讀書志學者，識與不識，咸謂柴子必非虛文固陋之儒，來修學政，上行下效，教化之盛，可以想。經學文章，從此益興矣。今柴子

滄洲の忠告

所建言施設，其偏僻不啻山崎開齋，而所薦引皆是迂闊陳腐，不知四書小學近思錄外他書可讀者也。柴子以其學專據程朱，適投合於當時宰執之所好，乃杖其權勢，欲禁遏非宋學者，是以大不合人意。文學之士，無不非議。且乘世變，欲傾奪累葉學士之職，諸學士相憤怨之，視如仇讐。庶幾乎洛蜀朋黨之禍矣。其言如此。鴻於是矍陽不勝，不知足下亦嘗聞其言而知其故乎。鴻竊意，諛諛之徒，方且稱贊功業，未嘗有一人以是聞於左右者也。非諛諛之徒，則必曰：彼方得時而恣意，無爲酬之以取禍。不若默而待之，不過數年，彼得自敗。由是觀之，當今讀書志學之士，於足下也，非諛諛則皆毀也。要皆不利於足下者也。若鴻則不然，知交不淺，情誼至深，不得不忠告。夫人心之不同，如其面。古人既言之，讀書學道，所見各異。而其所尊信，亦皆仲尼之教，而不出於孝悌忠信仁義禮樂治國安民之外。則必唯宋儒是據。鴻欲以國字述愚意，忽聞有一生，好性理學，乃作詩若書勸天下，其意蓋盡焚後世諸家不敢背從宋儒之論著書籍，而欲滅亡之矣。鴻竊謂此曹以私意媚足下，足以益足下之過，而不知海內躁擾，噫無識小人，其可醜已甚。鴻於是不得已，而具陳焉。冀足下平正其心，寬廣其意，上請當路執事諸公，速出令弛禁，不專信程朱，用漢唐傳疏，或從

事于王陽明。或用于堀河學。徂來說。博取衆家。學者唯其所好。是從。未爲害於道。苟不然。唯宋儒籍是讀。汨沒於小學。近思語類等數書間。其弊終成。不立文字。教外別傳。僅能以頭巾氣習飾其陋耳。鴻不佞。犬馬齡已過七十。自少壯所相識。儒生文士。不爲少矣。其好宋學。而博覽有文字詞藻。特肥後。藪子厚。浪華中。井子慶。及足下耳。他無幾。餘皆不肯從性理之言者也。凡學道之勤。在博讀群籍。而知聖人之教。不在於孝悌忠信仁義禮樂治國安民之外。則其所據經解。漢唐若後世衆家。各從其所好。何害之有。唯在其智愚賢不肖所用之何如耳。又聞足下謂程朱爲正學。以諸家爲異學也。夫異固不同之謂也。謂諸家異于程朱可也。而正者邪之反對也。苟不學程朱者。皆謂之邪。果其言是乎。他諸家姑置焉。皇朝博士家說經。自古至今。遵用舊典。專依注疏。不從程朱。豈謂皇朝用邪學而可也哉。由是觀之。唯宋儒學謂之正學。是亦私言不通之論也。鴻聞藤惺窩林羅山。雖專從程朱。其訓導未嘗如此偏僻矣。又嘗有人來說。皇殿新成。固有屏障圖畫之舉。事及江戶書院狩野住吉二家訪搜。而其圖式。足下與焉。河圖洛書。聖賢圖像。衣冠服色。制度失考。甚多。杜撰百出。五條管公辨駁之。足下不能答得罪。管公能救解之。其他輿說紛紛。此等事難必

信何也。則人情薄惡。出於妒口。亦未可知矣。鴻所愛懼。唯在學術之偏執。衆人不服。大損時體而已。千里遠絕。不能面陳。鄙辭濼覽。恐懼尤深。足下能愛而受之。歟。受而聽之。歟。怒而絕之。歟。抑上言於宰執而罪之。歟。鴻謹奉命而已。按此寬政六年二月事也。

右の一篇は先哲叢談に據る。

與滄洲先生書

西山拙齋

暴日辱賜賚臨。傾談一夕。積年疇渴頓已。多謝曷罄。但憾匆匆奉別。轉切懸歎耳。爾後暑徂寒來。伏惟文候萬福。往歲壬子之冬。一友人有以先生與柴博士論學書來示者。捧讀數回。不慊於心。先是正亦上書博士。懇懇學事。與先生所見。大相抵牾。窮意先生之說。施之詩社游衍。醉花吟月之時。則可。如施張宮進。修育才造士之日。則不可。因欲條陳區々。質諸左右。而以博士必常有答書。辨析之。吾儕不當越俎而言也。竊之三年。博士至今尙未答辨。想必有他故矣。則區々鄙懷。不可弭忘。乃敢具陳別幅。正也學識荒疎。且素不糊辭。令意過峭直。語涉觸忤。似非所宜。陳於長者之

拙齋の尺

前然詰難之言，不得不爾耳。孟子曰：不直則道不見，正亦將直之也。敢謂輸攻墨守，爭衡函丈乎哉！惟先生江海之量，容正狂瀆，不吝錫誨，為開茅塞，以照昏迷，幸甚。

別幅

同上

拙書の反駁

頃讀陳先生與柴博士書，慨然掩卷窮嘆曰：吁！先生何其論學術之疎，視公朝之輕，而知柴子之淺也。夫學之有正有邪，猶如物之有真贋，事之有可否也。世道升降，民俗美惡，將必由之，是故古先聖王，建學立師，以誨蒙士，詩書禮樂，以時其教，博約培達，各循其序，鼓篋之孫，其業夏楚之收，其威皆所以使學者進由正路，能成才德而不趨邪邁也。孔子謂子夏曰：女為君子儒，無為小人儒。何謂君子儒？致知力行，專講修己治人之道，所謂正學是也。何謂小人儒？假名亂實，偏術揚己，抑人之術，所謂邪說是也。易傳曰：差若毫釐，謬以千里。蓋言教學所由，不可不正，研幾工夫，不可差跌也。衰周以還，學政廢墜，異端邪說競興焉。楊朱之為我，疑於義，墨翟之兼愛，疑於仁，此皆說仁義而謬者。孟子闢之，以為無君無父，充塞仁義之賊。韓子推尊其功曰：不在禹下也。乃至陸九淵之頓悟，王守仁之良知，亦皆稱聖學而謬者。宋明諸賢，關之

以為陽儒陰佛，絕滅倫理之黨，後儒亦謂其功繼孟子矣。譬諸稂莠之害嘉禾，鄭衛之亂雅樂，不得不鋤之，放之，是孟子諸賢所以痛排峻擊，不遺餘力。亦仁人君子之心，有不得已也。況如本邦近世伊藤荻生二氏，或擯學庸繁辭，為非孔子之舊，或毀思孟程朱，謂皆聖人之道，外心性而說仁義，混王霸而譁禮樂，詭辨飾辭，簧惑後進，藉口古學，售己邪說，仇視先賢，罵詈溢巷。仁壽謂宋諸賢為祖儒，朱子為不仁之人，祖徠不術，目不識古書，其狂悖殊甚，近聞鄭露亦雅，賊水樂中詔暴南學，且有云以嘻何物小人，無忌憚孟子為盜儒，程朱為割竊云々，嗟今伊狀之言，與夫駭賊口氣相似何也。嘻何物小人，無忌憚之甚，自有儒者以來，所未曾有。漢儒所謂孔子讀而儀，秦行者甚，惑世誣民，充塞仁義之罪，奚止楊墨陸王之比乎。從此已降，俗儒效尤，驕傲自大，各執意見，謬解經傳，習洛閩，阿鄒魯，競立門戶者數十家，家稱古學，人術新奇，要皆醉二氏之毒，而微換頭尾耳，學術之裂至此，亦古來未之聞也。方今之世，任道君子，固當辭而闕之，禁而絕之，不待明者而後知也。今先生之言曰：讀書學道，所見各異，而其所尊信，亦皆仲尼之教，而不出乎孝弟忠信仁義禮樂治國安民之外，則何必唯宋儒是據，或用漢儒古義，或從事乎象山陽明若仁齋徂徠諸家，學者各從其所好，何害之有。唯在其知愚賢不肖何如而已。竊意先生徒知釋老之為異端邪說，不知吾儒中自有異端

邪說也。夫釋老之徒，各道其所道，故爲其異端，涇渭判然，固自易辨。如新儒之學，則必依託經傳，憑藉倫理，以勝其邪說。所謂假名亂實，似是而非者，塗人耳目，淪人骨髓，惑世尤甚。此先修之所以深憂遠慮，力關峻拒之也。果如先生所言乎？先王庠序之政，皆爲虛設。夫子之警子夏，亦爲贅言。而孟子何必關楊墨？宋明諸賢，何必關陸王哉？且夫漢士之人，亡論繼掖士子，即自武辨俗吏，以至農工商估，若婢僕娼優，率皆識字讀書，間亦解詩屬文。至如孝弟仁義之爲美，堯舜孔孟之可崇，亦皆無不粗識之也。則謂彼士男女，除緇黃外，皆聖人之教，不藉學政可乎？然漢唐以來，明王良相，勸輒議其廢興，而不措何也？蓋以世道升降之幾，所關非細故爾。而況本邦之與彼士，風俗殊異，知識不侔，則其教學之方，尤不可以不加慎焉。今乃不擇教之純駁，不論學之正邪，槩謂鈞是聖人之道，各從所好而無害，何其所見之泛濫也。有人於此，口嗽濁水，手持假金，謂人曰：鈞是水也，吾奚擇其清濁？鈞是金也，吾奚論其真假？則不啻其疎狂者幾希，吁！先生之論學術，得毋類於是乎？正嘗聞之父師曰：漢唐註疏諸家，專治訓詁，粗略旨義。至宋程朱二公，微義奧旨，粲然復明。始繼洙泗之統，繇是漢士學政，歸一洛閩，制藝科場，專用程朱傳註爲標準。朝廷以是策士，士子以是

應舉。父師之所授，與子弟之所受習，唯以斯學爲本。自宋季元初，歷明迨清，五百有餘歲于今，雖革命迭興，然學政盡一。無復異論焉。明氏叔世間，有立異者，亦唯私議草野，未曾有公言於廟堂上也。非唯漢士爲然，即朝鮮琉球諸蕃，苟從事於斯學者，亦皆率由不愆云。本邦之學，尊尙程朱，昉自惺窩藤先生。方是時也，閩國鼎沸，群雄兵爭，無能禮致先生而問學焉者。獨東照神君，大度卓識，首聘先生，問道講藝於干戈矢石之間。又舉其門人林道春爲博士，擢學政。此其所以翼戴王室，戡定禍亂，而能創業垂統，貽厥孫謀之端，蓋亦見于此也。慶元癸亥，已還，奕葉相承，堂構益隆。迨至常憲公立，賴宮建，聖堂仍令道春子孫世襲其職。統學政教士子焉。更辟木下順菴，以備顧問。親說易經于朝。於是斯文翕然大興。嗣後文昭公，擢新井君美，召三宅緝明等，有德公，延室直清，爲直講官。是皆一世醇儒，文行兼優，師承正學者也。（恭靖師事松永昌三，昌三嘗受業惺窩高之所，白石觀淵地，其皆恭靖門人）是時京師有伊藤維禎父子，江都有荻生茂卿師弟，各唱異學於民間。名噪海內，寔繁有徒。藩邸或有辟其徒充儒職，而未聞一人以其學進仕公朝者。可見列朝皆能遵奉祖宗崇信洛閩而不墜也。近日選舉博士，輔翼林家，禁遏異學，以振學政。正是公朝明良，所以深體祖訓，克修舊制，而柴子諸博士奉

行之爾。今先生誤信塗說，以謂柴子投合大臣所好，挾其權，建言施設，擅行黜陟，此豈非輕視公朝之甚乎？又先生引天朝博士家說經用古註疏，以爲異學解圍，其意蓋謂非是殺函之固，則十重鐵步障矣。雖然是亦有說，請試言之。恭惟中古王化之隆，通信李唐屢矣，聘使學生，虛往實歸，各以其所傳習，奏諸朝廷，建之學宮，而當時講誦，止是漢註唐疏，無有他說也。比宋學之東，神洲播蕩，兵燹相尋，車駕蒙塵，公卿星散，寧復逸問學術何如乎？逮僂武後，後光明帝，始信程朱，特詔講官，扈從朱註，顯講宋學，更徵布衣朝山某^{（號韋林庵，其名字）}，賜冠服，說周易，又御製惺窩文集序，以賞其首唱洛閩之功。天朝之學，於是幾乎維新矣。惜乎聖壽不永，嗣後講官，因循故常，未之能承行也。側聞今上聖明，好文尚古，典章文物，百廢皆興，況今斯學中興，公朝業已如是，而獨無聖斷乎？海內臣庶，刮目俟之耳。正往歲在京，上謁故明經博士佩蘭清君，語正曰：某擬祖諱賴業，嘗爲後鳥羽帝侍講，時於戴記中，標出大學中庸併語。孟孝經，自爲五書，以進朝廷。爾後百餘年，而朱子四書集注，始傳于本邦，其所表章，全與家祖見和符。由此學庸二書，專用朱子章句進講，其餘三書，或依漢註，或從宋註，又有家學說，唯遵朝旨而說之，未有定論也。夫大學先聖教人之法，初學入德之

門，中庸孔門傳授心法，學問極功也。經筵之講，於是二書，顯宗朱子，則大本既正，歸趣不差矣。由是觀之，天朝明經家，亦是洛閩之學也。但其末稍微有異同耳。視夫伊荻諸儒，誣聖叛經之說，霄壤懸絕，豈可同日而論哉！先生之於佩蘭君，不啻金蘭之契，想亦依聞其說矣。今方牽而合之，以爲異學之黨，援顧不亦誣乎？嗚呼！佩蘭君沒而有知，其謂之何？語曰：君子不黨。又曰：不阿其所好。惟先生其思之。至若曰：柴子所薦達，皆是迂僻腐儒。又曰：柴子乘勢，欲傾奪林家云云之類，誠是野人語。以小人之腹度君子之心者，妬口醜詆，亦無忌憚之甚。固不足辨。此豈所以議柴子諸學士乎？先生與柴子，昔結社洛下，周旋有年，應知其爲人矣。何遽信訛言浮說，而責之故人乎？且曰：文學之士，非議柴子，致海內躁擾，未審何地方誰氏子。起此躁擾，先生豈確目而審耳之耶？將謂塚田虎等上書也耶？渠徒以佛氏異宗武伎分派，視吾儒，謂我亦當效彼，多見其不知聖學一本之道也。亦惟蜀犬吠日，桀狗吠堯，吠其所怪耳。猶之爭，不日當絕跡，響何躁擾之有？又嚮承高論，先生此書，擬司馬文正諫王安石書云爾。夫安石剛愎自用，擴群賢行新法，竟釀宋室之禍，溫公先見之明，忠告之言，悉中其肯綮矣。今柴子遵奉台旨，釐正學政，以贊升平之化，其功偉矣。先生乃隱然

比之安石。何其不知故人之甚也。噫。無識小人。如正不佞。賴有父師遺訓。嚮方欽化。不惑。以先生博洽文雅。睨視一世。尙且迷復自快。恣情縱筆。敢梗道化。悍然不顧。何也。得非異學弊風所錮。雖高明亦不能免乎。冀先生平正其心。寬廣其意。再致書柴子。以謝前言之過。且頌其書稿。遍諭海內。知交及門下學徒。以解其惑。俾之革面洗心。從事乎正學。則先生改過從善。作人濟物之美。愈光大於前日矣。正也。辱過愛二十餘年。茲盡一得之愚。敢布腹心。鄙辭草率。不避忌諱。唐突瀆覽。悚懼尤深。傳曰。惟善人能受盡言。先生其受而聽之。與。笑而置之。或怒詬而絕之。與。抑言於上而罪之。與。正謹俟命而已。

寬政六年甲寅冬至日

(右二篇四山拙齋文と題する一冊の寫本に據る。先哲叢談載する所と頗る異なれり。次に又重東治洲先生の一編あり。其文に據れば前二篇甲寅に成りしも。丙辰(八年)に至りて治洲に寄せし者なり。又題與赤松國燾論學書後二篇を附し。且つ其二には賴春水此の書あるを聞きて而して喜び書を寄せて稿を徵せしより。疾を力め之を寫せし由を記せり。)

(十三) 王政維新と宋學

維新前の教育 ▲大日本史と日
本外史 ▲靖獻遺言 ▲薩長土肥

の文武一途
精神教育
と孔孟

學園皆兵は建國以來の大法にして、教化の道は文武一途を尙ぶこと、誠に列聖の鴻談たり、而かも中古文武岐れて二と爲し、以て王朝の衰を致せり、降りて武門の世と爲りて、亦た文武の兼備を主とするも、守成の人、往々驕惰に流れて、振勵を知らず、徳川氏の初め、猶馬上の艱難を説きしも、物換り星移りて、上下文弱に流れ、旗下八萬、脂粉の氣を帯ぶるに至れり、有心の人起りて文武を獎勵するも、奇矯の士は、之を蚊蚋に比するに過ぎず、葵章の業は、己に其中葉に傾けり、然れども四百諸侯、猶古風の律義を守りて、文武を怠らざる者あり、而して士民の精神教育は、一に孔孟の道を以し、宋學一統の世と爲りては、其の教養更に堅確の趣あり、小學の洒掃應對に始まりて、孝經の立身行道を志し、大學の誠論語の仁、孟子の義、中庸の性、以て修齊治平の道、孝悌忠信の行、浩然の氣、惻隱羞惡辭讓是非の端、天下の達徳

程朱派の教育

たる知仁勇を研究し、尤も省察の工夫を重んじて、其の性癖を矯むるに氣質變化の説を以てし、人々以て聖賢たるべきを期せり、程朱派の村夫子、不文にして固陋尊大にして迂腐なる者なきに非ざるも、概皆踐履を慎むが故に、子弟を程朱派に托するの危険なきは、父兄の喜びし所以、其の檢束頗る嚴にして鞭撻も亦急なりしを知るべし、天の才を賦するや、一長一短あり、言に訥にして行に敏、行事に疎にして才辯に巧、皆用處あり、沈香不焚屍也、不放底人物、未だ與に天下の事を語るに足らず、之を程朱派の同一典型に鑄鑄せんとするは、有爲の人才を造る所以に非ずと雖も、之を才を尙びて行を檢せざる者に觀れば勝るや、遠し、鷄鳴狗盜は變局に用ありとて、之を平時の教に施す可らざればなり、且各藩士人の教育は、徒らに學問文章に汲々たるを許さず、武藝以て其の心身を鍛ひ、吏務以て其材幹を試み、以て文弱と迂濶との病を去り、之に加ふるに程朱派の特有の機鋒を以て、士氣を鼓し名節を磨きしより、大節に臨みて奪ふ可からざるの素養を得る者多かりき、而して外難は起れり、尊王の義を唱へて國事に奔走せし者、皆讀書人に非ざる無し、讀書人に非ざれば名分を辨せず、國學者漢學者に論なく、書を讀みて名

武藝と吏務

讀書人と名分

分を辨する者は一時並に起れり、而して名分を辨するは朱子學の本領なり、故に維新の志士に宋學派多かりき。

温公遺鑑
朱子綱目
正潤論
朱子派

大日本史

三宅觀瀾
栗山潜鋒
朱舜水と
義公

朱子が孔子正名の本意を學び、春秋筆誅の遺法を取りて、史筆を揮へる者を通鑑綱目と爲す、資治通鑑は司馬温公の著にして、其の歷代を叙するや、功業の實を取りて、正潤の説に拘泥せず、朱子は未だ懲勸の法を盡さずと爲し、名分を説き正潤を明かにし、群を誅し魏を斥け、彈丸黒子の蜀を以て正統と爲せり、源親房は資治通鑑に熟せしも、朱子綱目を讀みしや否やを知らず、然れども其の神皇正統記は、朱子の史筆を學ぶに似たり、水戸義公の大日本史を著はすや、親房の遺意を取りて、朱子の成法に擬し、神器の所在を重んじて、南朝を正統と爲せり、而して正潤の論起り、三宅觀瀾は神器説の栗山潜鋒と相容れず、去て中興鑑言を著はしき、温公の學識を以して、猶臣愚未だ前代の正潤を識るに足らずと云へり、況や末學予が如きをや、然れども亦嘗て之を我が師に聞く、義公の師事せし朱舜水は、朱子と同族にして、朱子を尊信せしより、義公も亦朱學を尊信し、朱子の正潤論は義公神學の見と一致して、修史の法を朱子綱目の史筆に取り、以て正潤を定め忠邪を識せ

り、其の本意は嗚呼忠臣楠子の墓を立てしにも知らる、朱子の時、南宋の偏安は蜀漢と其の勢を同じくす、朱子の魏を斥けて忠義の氣を鼓せしは亦宜なり、而して我南北皇統の争は、皇室の内訌にして、三國鼎立と異り、義公の時は朱子の世と同じからず、史學上より之を見れば、正潤の論、未だ必ずしも公ならず、且つ朱子派は悪を惡むの心甚しく、跡に就きて心を誅し、褒貶太だ過ぎて、論は苛酷に失し、人は褊狹に陥りて、往々黨禍を生じ易きは其の病處たり、水戸學の如き最も然りと、是れ史學上の公論なり、但風教上より見たる大日本史の價值は、朱子綱目の上に在り、朱子綱目は中原を復する能はざりしも、大日本史は旋乾轉坤の功を奏したり、何の謂ぞや、尊王の大義は此の書に依りて吹込まれたればなり、忠孝節義は此の書に依りて振勵せられたばなり、而して足利十三代の木像の首は飛んで、徳川三百年の覇業は覆りしも、亦此の一書の力與りて多きに居ればなり。

頼山陽の日本外史は後れて出でたりき、彼れは二洲精里を提擧しつゝ、宋學に歸せしめし頼春水の子にして、嘗て昌平黌に學びつれば、亦宋學の一産兒たり、先輩其の經義に疎なりしを諳るも、其の識見は一世に高く、外史の書、尊王斥霸の意を

朱子漢の
病處
史學上の
公論
大日本史
と風教

日本外史
の感化

寓して忠孝節義を鼓舞せしは、大日本史と其の旨を同じくして、其の世間に盛行せしは、古來邦人著書中に罕比なり、然れば其の感化力は、大日本史に過ぐるも及ばざるなく、青年子弟を激して維新の際に蹶起せしめ、以て大權を武門の手より奪へり、幕府を仆すべき此の書が、先づ幕府の忠臣たる樂翁公に上られしと、春水嘗て知を公に受けしに因る、彼の大日本史が幕府の親藩に成りしとは、並に人間以外の交渉あるが如き心地ぞする。

開齋の學は、高足淺見綱齋に至りて發展せり、綱齋名は安正、近江の人、醫より儒に歸し、開齋の學を傳へしも、敬内外と神道とには服せず、京師に隱居して諸侯に事へず、刀に赤心報國の四字を刻し、楠公を欽慕して望楠軒と號せり、其が尊王の志以て知るべし、其の著はす所の靖獻遺言は、漢土の忠臣義士が、素定の規臨絶の音、衰頹危亂の時に見はれたる者を編して、諷誦に便にせし者なるが、綱齋の跋に、捧誦して覆玩すれば、精確惻怛の心、光明俊偉の氣、人をして當時に際はりて其の風采に接するが如く、感慨歎息、歎慕奮發、自ら己む能はざらしむと言へりし如く、其の感化力の偉大なるは、前三書に譲らず、而して本書の光焰は、一たび延亨寶曆間

開齋の靖
獻遺言

竹内式部
と稱す

桃園帝と
垂加學

寶曆復古
の失敗

山縣大貳
の正名篇

に燃上れり竹内式部は越後の人京に入て若林強齋(綱齋高弟)の高弟なる松岡玄齋に垂加學を受け、夙に勤王の志を抱き、正親町三條家の臣藤井右門と結びて、畫策する所あり、遂に指紳家に入して、綱齋の靖獻遺言を講じければ、公卿從學する者多く、徳大寺侍從公城は、式部の講を聴きて桃園帝に進講するに至りしより、指紳の學風一變して、朱學大に行はれたり、花園帝聰明學を好みて、後光明帝の風あり、公城等大に喜び、同志を勸誘して王政の復古を企圖せしより、式部は諸獻遺言を講ずるに當りて、孔明八陣の圖を引き、遂に韜略を講じけるが、關白道香幕府を憚りて、帝の垂加學講筵を停め、所司代に告げて式部を放逐せんことを謀り、詎ゆるに指紳に勸めて武を講ずるを以し、之に囹圄を繋ぎ、從學の公卿を禁錮し、且公城に命じて式部の傳書を返さしめんとせり、公城曰く、我れ朱氏を學ぶ、未だ式部の學を學ばずと、遂に落飾して嵯溪と曰へり、式部は追放せられて伊勢に居りしが、其の友山縣大貳も亦三宅尙齋門下の加々美櫻塙に學びて、關齋派を尊信し、常に王室の式微を慨きて正名篇を著はし、以て名分を辨じつ、式部右門及び小幡侯の臣吉田玄善、津田頼母等と交り、文武を講じて兵法の得失を論じ、江戸城攻撃

精神教育
の課本

水戸志
士

薩摩の學

の畧に及びければ、忽ち幕忌に觸れて極刑に遭へり、或は云ふ式部大貳と謀り、主上を芳野に奉じて義旗を擧げんとしきと、會式部桃園帝の大喪に奔りて京に入りしより、遂に大貳の連累を以て捕へられ、明和四年八月八丈島に流され、船中病に罹りて三宅島に死せり、事は正中の發難と相似て、而して後人其の風を聞きて興起せし者多く、靖獻遺言は士林に盛行して精神教育の課本と爲り、之に因て名節を養ひ土氣を鍊り、以て維新の際に至り、幾多の志士仁人、身に一劔を横へて、朗々として書中の歌詩を吟じながら、水火を蹈み鼎鑊に臨み、以て王事に殉せしは、予輩の親しく故老に聞く所なり、即ち王政維新の功を論ずる者、亦一部靖獻遺言あるを忘る可からず。

且つ夫れ維新の際に多く志士を出し、地方は皆宋學と縁故甚だ深し、水戸義公以来の養成する所、東湖と爲り甲雲齋と爲れり、但水戸の學風、惡を惡むこと甚しきより、禍固に失して黨禍を生し、内訌相踵きて、中道に墜跌せるは惜むべし、薩摩は宋學先鳴の地にして、後には鳩巢の學行はれ、尋きて山崎嘉點四書は天保中に刻せられ、程朱尊信の學風を守りしが、但薩も亦黨禍多く、近思錄崩崩は騒動なり

長州人の才氣

の如き講學に因て騷動を引出したるあり、且異説を唱へし學者の遠島に處せられし者甚だ多し、是れ朱子學の未弊たり、而も薩人は之を救ふに禪と隼人氣性とを以して、一種の律義にして勃爨(無頓着)に、且機敏なる氣風を養成しき、長州は大内文學の素を受けて、加ふるに古來外交の長技を以し、其人才幹を以て勝れり、藩學明倫館は物門の高弟山縣周南督學たりしより、物學盛行の弊は、政事の才を尙んで、其の行を檢せざる風ありしも、後周南の子孫山縣太華(名禎)字文祥は、家學を棄て、宋學を奉じつ、是より國中概皆程朱を主とし、吉田松陰の如き、王學に出入せしも、其の根柢は宋學なり、土佐は南學の蟠據する所、山内氏は長曾我部氏の後を承けて、文武を奨励せしが、或は云く、土佐人の鼻柱強く論争を好むは、長曾我部氏の遺臣山内氏に抗して、互に相下らざりし餘弊に出づと、其れ或は然らん、肥前は長崎の聖廟最も古く、多久の聖廟之に次ぎ、本藩佐賀の弘道館創立は後れたりしも、町人武富成亮の中村傷齋に學びて、早く已に聖像を祀つるあり、後ち古賀精里を出し、穀堂家學を傳へ、後ち王學頗る行はれしも、閑叟公は草場佩川を擧げて、朱子學を維持せしめたりき、肥後は上に銀臺公(重賢)あり、下に賢佐堀勝名あり、玉

土佐人の特性

肥前の聖廟

肥後の二聖廟

山孤山相繼ぎて學を督し、後ち實學派學校派に分れしも、其の本は同じく宋學に在り、斯く記し來れば際限なし、要するに維新勤王の志士は、概皆宋學盛行の地に出でたりき、而して閩齋派の行はれし會津は方嚮を誤りしも、亦各其の事ふる所に忠なりし者のみ。

建武中興と明治中興

後醍醐帝の朝には、宋學を講じて建武の中興を致せり、徳川氏の末には、宋學中より多く志士を出して明治の中興を致せり、宋學が危亂の際に功あるや如此し、是れ宋學の功と謂んよりも、儒學の功なり、日本固有の美德に同化せる孔孟道德の感化なり、建武中興の中廢は、蓋し講學の未だ至らざるに在り、明治中興の業は、確立して動かす、益將來に恢弘せられんとす、是れ維新後興學敷文教化日に盛なるに因る、則儒學の講せざる可からざるや言を待たず。

(十四) 結 論

領考の要

予は已に我邦に於ける宋學の源流を叙して、略其の要を盡せり、而して古今人の猶未だ確據を擧げ得ざる宋學傳來の人と年代とは、予も亦未だ其の史證を示す能はざるを以て遺憾と爲す、但し漢學紀源の俊仍儒書齋來説は、僧史に記載ありて據と爲すへきに似たりと雖も、所謂儒書中に宋學關係の書ありしや否は知る可らず、予は乃ち當時日宋交通の頻繁に徴して、書籍の舶載も亦少からざりけん、と推測し、周張程朱の書は、俊仍時代の前後に於て、數回に分來したるなるべく、其の人の時代に隨ひて、太極圖説は最も早く、朱子の四書は最も遅かりけん、と臆斷する者なり、且つ今人の宋學を説く者、概ね皆一山を以て祖と爲せるが、是れも亦漢學紀源に本づきて、一山が儒學に通したりしこと、其の會下に虎關等を出し、ことを以て史證と爲すなり、然れとも予は辨圓が三教に通して三教要略を著し、程子の語を引ける大明録を講じたりしこと、及び道隆の法語に大學の誠意正心を引きしこと、大体の法語に窮理盡性及び性命等の宋學らしき口吻あること

に徴して、其の宋學中の人たるを證し、一山以前、早く己に宋學を傳へたりし確據
施ふ可らずと斷する者なり、此の二者は、予の所見、稍古今人の説と異なる、豈敢て自
らの確なりと謂はんや、姑く研究の結果を述べて、以て後考に供するのみ。

史上に著はれたる宋學研究の始は、後醍醐朝に在り、而して玄惠は禁裏風の祖に
して、虎關は僧學派の祖なり、玄惠の學統は、源親房、菅原公時、紀行親、一條兼良、中原
康富、清原業忠、同宣賢等に傳はりて、朝廷に行はれ、虎關の學統は、中岩、義堂、岐陽、雲
章、惟肖、桂菴、文之に傳はりて、武家諸侯の間に行はれたりき、朝廷の學は論孟其他
の經籍、猶古注を守りて、唯學庸に章句を用ふるのみ、故に玄惠派の宋學は遂に漸
く振はず、而して禪林の宋學は、見性成佛、窮理盡性の比較研究と爲り、其の傳甚だ
盛なり、然れば朝廷に於ける宋學の效果は、正中元弘の二難に發揮されし後、寂と
して反響を絶ちしも、禪林に於ける宋學の效果は、禪徒に依りて武家諸侯に及び、
名教を亂離の間に維持するに與りて力ありき、是れ予の宋學史研究に際して、最
も意を致す所の者なり。

五山文學
の價值

予嘗て五山禪徒の語錄外集を涉獵して、以謂へらく、虎關の史才、中巖の文章、絶海

儒者の佛
見

の近體詩は、今古の叢林に獨歩する者たり、而して禪徒駢體を以て公文の式と爲
すが故に、諸疏皆燦乎として觀る可し、然れども其の詩は、蔬筍の氣あり、文は和習
あらざる者希なり、故に五山文學は、文學としての價值よりも、史料としての價值
を最も貴ぶ可しと爲す、是れ世の知る所なり、而して僧學と武家教育との關係を
徵す可き史料は、五山禪徒の語錄外集に過ぐる莫し、先賢の五山文學を論する者、
往々文權の僧徒に落ちしを嘆じ、名教滅絶に幾しと爲す、夫れ天皇より之を視れ
ば、儒者も赤子なり、僧徒も赤子なり、教化より之を言へば、神道も儒學も佛教も皆
列聖の取りて以て王道を助くる所以の者たり、今儒學の僧徒に因て講せらるゝ
や、直に其の儒者に非ざるを以て、名教滅絶に幾しと爲すは、豈儒者の僻見に非ず
や、儒林に人なければこそ、文權は僧徒に落ちたれ、儒者何の僧徒に對して憤るへ
き道理かあらん、佛徒に依りて儒學を講せしが爲に、儒者の儒學を講するに比し
て、孔孟の本旨、闡明せられざりしは、固より之あり、然れども亂離の世、儒林に人な
くして、佛徒も亦儒學を棄てたらんには、名教の壞敗果して如何ん、儒學衰頽の世、
幸に儒學を好める僧徒ありて、儒釋不二の理想の下に、講究を怠らざりしが爲に、

武人をして儒釋を兼學せしむるを得たり、孔子曰く、管仲なかつせは我れ其れ被髮左衽せんと、予は乃ち儒僧なかつせは我れ其れ禽獸たらんと曰はんのみ、是も亦本編を讀む者の宜しく意を留むべき所の者なり、

且つ夫れ元寛文運の興隆も、亦五山學僧の遺澤に出づ、惺窩と文之點との關係は、必しも斷するを要せず、隨て惺窩の學系を文之の下に繋ぐるを須ひさるも、惺窩は相國寺に學び、羅山は建仁寺に讀み、其の餘江村專齋、三宅寄齋、永田善齋等、皆初め緇徒に學び、尺五活所等、益を建仁の義源紹柏に受け、闇齋は吸江寺に出でたり、則ち徳川文學の淵源は、之を五山に發する者なり、玄惠派の學風は、一たび絶えて而して忽ち水戸に起れり、水戸の學は親房を宗とし、大日本史の正潤忠逆は、神皇正統記に本づきて、而して朱舜水に潤色されし者なり、親房は神儒佛を打ちて一丸と爲して、而して闇齋は佛を排して神儒を混す、頗る其揆を一にせずと雖も、亦其の趣を同じくせずんば、あらず、則ち文教の推移を説く者、淵源を詳にせざる可けんや、

訓點と教
化普及

徳川文學
の淵源

學問は廷臣の專有と爲り、武門の世と爲りては、所領ある武士以上こそ學問もし、けめ、國民の教育は度外に附せしが、徳川氏の中葉以降、士人として書を讀まざる無く、農商の家も亦絃誦の聲あり、郷學邑學、競ひ起りて、教育の普及、古來未だ曾て見ざる所たり、是れ徳川氏及び列藩の獎勵に出つと雖も、四書の訓點なければ、爭てか此に至るを得ん、唐土の音讀を傳へたらんには、學問の開くること今日に倍すべしと謂ふ者は、教化の普及を思はざる者にして、學問を儒林の世職と爲し、或る階級に限るべき者ならんには、其も亦可なり、然れども國民に普及せしめんとせば、譯讀反點の必要固より言を待たず、漢唐の音讀法を傳へて改むる所なかりけんには、國語と兩立せずして、儒學は今日に傳はらじ、好し後世に傳はるとも、俗僧の佛經を誦すると同じく、意味は明ならずして、實踐道德に輔益すること少かりけん、言盡の幸ある國として、王仁以來譯讀の法ありしなるべく、苦心に苦心して和點成れり、是に於て音訓並ひ用ひて反點を附け、本文を讀下せば、講釋を待すして大意は傾解し得べく、身を殺して仁を成す、仁者は敵なしなど、俗語同然に用ひられて、國民道德を涵養するを得たりき、然れども古點簡略にして、且つ家々の秘

文如の功

傳あり、亦未だ一般施行の刊本あらず、讀を受くるに隨て寫さる可らず、其の普及を妨ぐるや大なりしに、新注の和點は、岐陽桂菴を経て、文之に成るや、親切丁寧、註意分明、一讀了解すべく、如竹之を刊行するに及びて、海内に風行し、徳川三百年間の普通讀本と爲りて、戸々に藏し人々讀むを得たり、而して後匹夫匹婦も孔孟の道を知りて、日本魂武士道は維持養成されたり、是れ文教普及の賜にして、岐桂文如の功に非ずや。

程朱學の長短

宋學が五山僧徒の手に在りし間は、禪理との比較研究に因りて、多少の趣味なきに非さりしも、自ら入主外奴の見ありて、孔孟と程朱との眞精神を發揮する能はず、而して學説として聽く可き者ありしは、實に樞窩羅山以後なり、寛文以降、學者輩出して、學説隨て興り、哲學上倫理道德上、各講明する所あり、井上氏の日本朱子學派の哲學は、専ら其の學説を論述せり、予の此の編は、傳來流布の源委を叙するを以て、主と爲すが故に、其の學説は之を省畧に附す、然れども亦未だ嘗て聞く所なくんばあらず、請ふ聊か其の長短を言ん、程朱學者の身を持するや、或は曲謹に失し、或は驕筋に流れ、或は郷愿に似たる者あり、其の物に接するや、是非の甚しき、

程朱學の長短

或は之を酷薄に失し、好惡の甚しき、或は之を褊狹に失する者あり、其の子弟を教ふるや、之を規矩繩墨に驅るに急にして、器に隨て材を成すを知らず、往々奇才を碌々化する者あり、重野博士嘗て學士會院に演説して、程朱學者は律義一邊を守りて、進んで爲す有るの徒を出さずと云へる者、能く其の短を指摘せり、然れども程朱派は又一種の熱烈なる感化力を有す、名分を正し、義利を辨し、是非を明にし、淑慝を分ち、以て士氣を鼓し、恒心を養ひ、輕佻浮薄の俗を化して、忠厚篤實の風と爲すは、其の長所なり、而して氣質變化の説に至りては、學校まれ家庭まれ、子弟を教育する者の興り聞かざる可らざる者に非ずや、則ち全然朱子學者流の教育を今日に用ひ可らざるは、辯を待すと雖も、今日の教育も亦朱子學派の所説を棄つ可らざるや明なり。

抑今人口を開けば、輒ち道德の衰頹を説く、衰頹を回さんと欲せば、國民道德の基礎を究めて、之を今日に講明せざる可らず、今人又口を開けば、輒ち武士道の維持を説く、維持を努めんと欲せば、古來武士道が如何にして養成されたりやを尋ねて、之を今日に實行せざる可らず、予は儒學が國民道德の基礎の大部分を占むる

を信ず、而して又儒學が武士道養成に功ありしを信じて疑はず、儒學研究には註疏あり、折中あり、陸王の學あり、伊物の説あり、程朱の學は亦其の一に居るに過ぎず、然れども古註の學衰へて、程朱學鎌倉時代に起り、足利時代に研究せられ、戰國を経て徳川氏に至る迄の三百餘年間は、實に我が邦武士道發達の時期たり、而して此の間學問らしき學問は程朱派あるのみ、徳川氏に至りて文運勃興して、儒學最も盛んに、陸王伊物學說四に起りしも、各藩藩學の尊奉する所の者は宋學にして、寛政以後は程朱に歸一せり、故に徳川三百年間の人心を支配せる儒學は、即ち宋學なりと謂ふも恐らくは不可なからん、予が此の編は杜撰粗漏の譏を免れざるべきも、鎌倉末造以來明治中興に至るまで、約六百年間に於ける宋學の源流を叙して、往々各學派に旁及せり、則ち或は國民道徳の基礎を研究し、武士道教育の由來を尋釋して、之を今日に回復し、之を將來に維持せんとする人々の參考に供して、裨益なくんばあらじ、是れ編者の微衷なり。

若し夫れ古の儒學教育を其の儘に今日に施さんする者あらば、不通の論たるや、吾を待たず、支那聖賢の經籍とても、取舍損益せざれば、時勢に適應せざる者あり

然れども道は今古に互りて變せず、人道の大本は千古不易なり、且國各其の體を異にし、邦各其の俗を殊にす、而して千數百年來の國民道徳の基礎たりし儒學は、漢宋の註、江崎伊物の説各其の趣を異にするも、其の歸を一にし、經驗と磨瑩とを積み、其の國體邦俗に適應する所以の者たり、其の國體邦俗に適應せし教育に因て發達し來れる國民道徳は、他邦に異れる力量と光輝とを有す、是れ我が國が二大戦役に經驗する所にして、歐米人の驚歎する所なり、斯の道此の教育にして、歐米にも存したらんには、彼は更に驚歎すまじ、歐米に之なければこそ、彼等は驚歎すなれ、驚歎の餘、或は我に學ぶ者あり、我國人は彼等の驚歎に因て、始て斯の道此の教育の尊ぶべきを知りしもあらん、儒學の衰頹今日の如くにして、斯道の復興を望むも得んや、他日彼等が或は武士道を學び、日本的儒學を興すあらんか、我國は翻て隣家の寶を羨むも亦己に晚し、之を隣人に求むれ勿れ、寶は我が高閣に在り、之を高閣に取りて、之を今日に講じ、新古を折中し、程朱陸王を參酌し、我邦諸儒の損益する所の美を集めて、時勢に適應すべく、教育上に用ひば、其の効果は十年ならずして有事の日に顯著ならん、世界主義と云ひ、新しき道徳の原則など云

世界に特
殊なる倫
理道徳

へばとて、二千六百年來の我國に於ける道徳中に包含せざる者は蓋し希なり、唯之を講明し之を發揮せざるのみ、之を講明し之を發揮して、而して更に移して以て我に用ふべき者を彼に求めて、世界の通論公徳を行ふべきのみ、萬邦交通の時、信教自由の日、之を歐米氏に聞き、之を耶蘇氏に學ぶ、固より不可なし、但世界に卓絶せる萬世一系の帝國には、又世界に特殊なる二千六百年來の倫理道徳あり、倫理道徳問題は日新の科學と同一視すべき者に非ざるを知らざれば、毫釐の差、恐らくは千里の謬、あらん、予は風教の任に在る人、及び世の學者先生が、三たび意を此に致さんことを望む、是れも亦予の淺學自ら揣らす、此編を公にして教を大方に請ふ所以なり。

日本學史 (終)

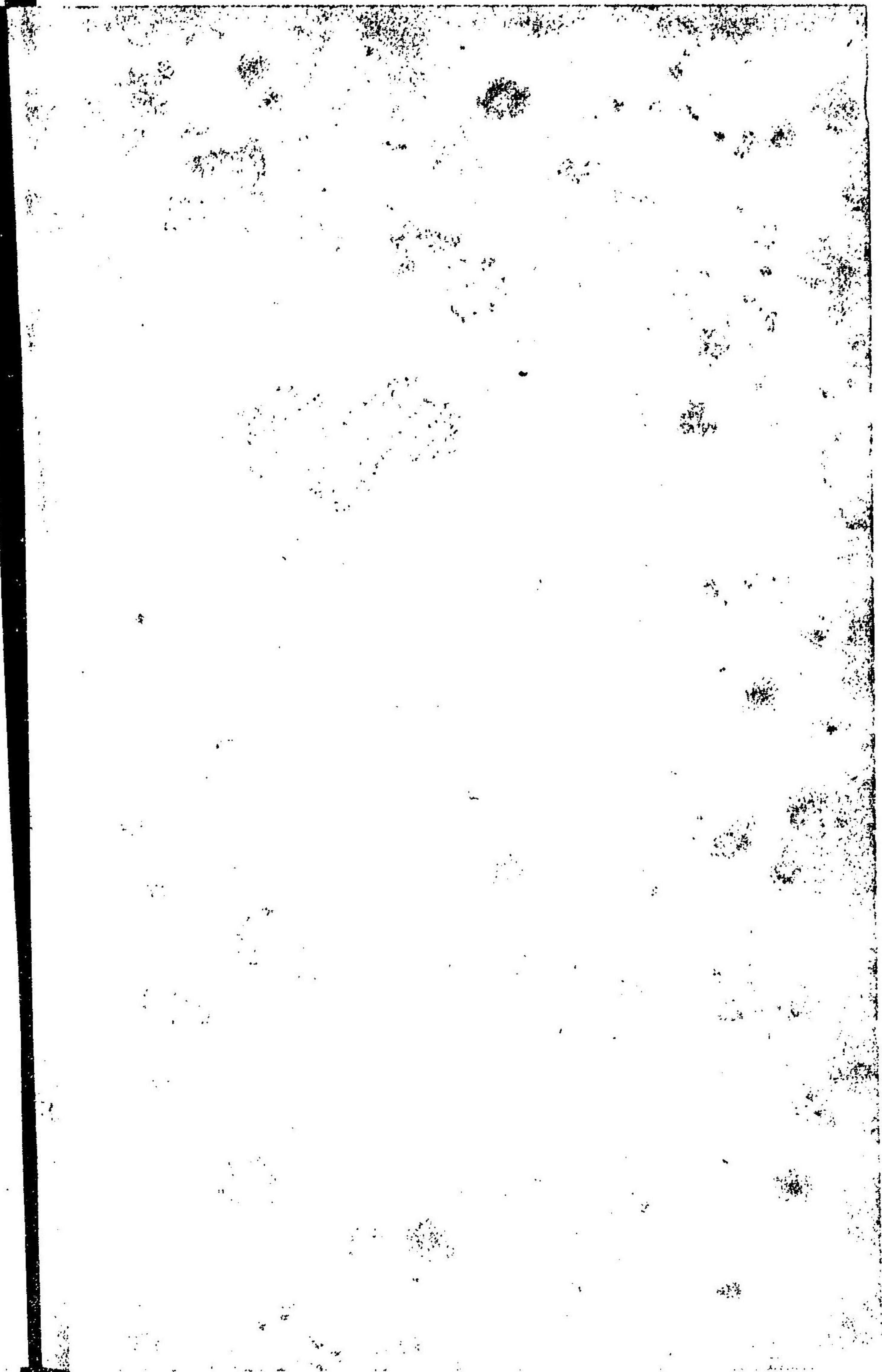


保木新推津 同上



均津榮奇木像

國安別名均奇木像



宋學考餘錄

薩摩の學風

舊國物語

薩摩に舊國物語といふ寫本あり、むねと軍學士風を論じて、薩摩には自から薩摩の兵法禮式あるを説き、甲陽軍鑑の偽作、及び甲州流の兵法伊勢流の禮式などを駁撃せし者なるが、中に薩摩の學風を知る可き一節あり。

光久公御代、鹿兒島の學文師は東郷九右衛門といふ人也、中畧、貴族の人にて、我が宅に來らざれば、其の宅に行き書を講じ教ることなく、手習學文の諸士、富貴貧賤の師弟を分けず、泰清君御侍講にも、其外何時も、講釋の終には、日新主の「古の道を聞いても唱へても我が行にせずばかひなし」と云ふ御詠歌を、二三返高らかに吟ずることを定式とせり、此御詠歌を書を講じ終りたる跡に吟ずることは、御先代よりのならばしにて、伊集院仁左衛門と云ふ人まで、其の遺風を傳繼ぎたり云々。

漢讀の法

東郷重經

山口治易

伊集院俊矩

學風一變

士人の典型

俊矩の逸事

東郷九右衛門重經は如竹門人にして、伊集院仁左衛門俊矩は、重經の門人山口治易に學びし人なり、重經如竹に學びし後、京師に游學し、延寶二年に歿せり、治易は常に朱子語類を讀み、性理に精しく、又德行を以て聞えしが、寶永三年に歿し、俊矩は六十七にて世子の御守役と爲り、慈徳公(宗信)に侍讀し、寛保二年に七十二にて江戸に歿したりき、桂菴文之は詩文章にも達したりしかど、如竹散人に至りて、心を詩文に留めず、専ら躬行實踐を尙びしより、重經治易俊矩等、並に踐履を主として、花やかなる文學を好まず、講釋の後には、我行にせずば甲斐なしの御歌を吟ずるを定式としたりしは、學風の一變と謂ふべし、或人俊矩に字を尋ねければ知らずと答ふ、此位の字をと云ひければ、自分は聖人の道を學びて身に行ふ學文なり、字義などは文章者へ御尋ねなされよと云へりとなり、薩摩の士風が律義なる代には、不文の嘲を招きしも、亦斯る教育法にや因りけん、俊矩は當時士人の典型と云はれし人として、俊矩言行録と云ふ書物も傳はれる程なるが中に、面白き事あり、俊矩江戸よりの歸途難船に遇ひけるに、人々恐怖色を失ふも、俊矩は神色自若として、笑談平日の如し、後多人數列立ちて釣に出でしに、殊の外海荒れてあぶなか

大藩の士風

菊池東与

深見玄岱

鳩巢學派

山田月洲

りければ、俊矩此處にて相果ば残念なりと、少々あはてたる體なりけるを、或人後日俊矩に向ひ、江戸よりの御歸國の難船には、泰然自若たりし足下が、今度はいかなれば斯くあはてられ候やと尋ねけるに、然ればなり、歸國の節は公務にての事なれど、此度は自分の游山にて死候ては残念と思ひ候故なりと答へし由、此は味ふべき事にて、死を恐れざるのみを武士道と云ふにあらで、死處を得るを大丈夫と爲すの本意顯れ、進退生死に、餘裕あること、大藩の士風と云ふべき。

扱講釋の終に、我行にせずばかひなしと吟する定式は、俊矩の時までとあれば、元文寛保の比までは行はれしも、其の風漸く廢れにけん、是より先き、光久公は菊池東与(近江人、稱藤助羅山門人)を聘して儒員と爲し、久しからずして辭去し、尋ぎて深見玄岱(即ち高天濤、稱新右衛門明人、高壽覺の孫)を聘用せしも、幾ならずして幕府の擢用する所となれり、而して鳩巢の學は漸く此比より薩に行はれたり、兒玉圖南(名一風、字希雲、郡山原與、名員雄、志賀登龍、名親章、初め仁齋門の松岡恕菴に從游す等)、江戸に游びて鳩巢に學び、山田月洲(名君豹、字文蔚、郡山蘭曉、名國華、字元實)等は、鳩巢門人の河口靜齋、伊東濬齋等に學び、月洲尤も詩文を能し、七律に長

榮翁公の
創學

じたり、藩主重年重豪二公に侍讀し恩遇殊に渥かりき、其の高弟に山本秋水、赤崎海門あり、三位中將榮翁公(重豪)の安永二年を以て、藩學造士館を創立するや、秋水は督學として學制を定め、海門は教授として之を助けたりき。

山本秋水

山本秋水、名は正誼、字は子和、傳藏と稱し、秋水と號し、晩に小醉翁と號せり、幼にして孤と爲り、家又貧なりければ、母氏に従ひて外家に養はれ、稍長じて志賀登龍に學び、年十九にして山田月洲に師事し、後ち藩主に扈して江戸に遊び、物門の于麟と稱せられし餘熊耳(大内承祐)字子維唐津藩儒に學べり、然れども其の奉ずる所の學は、鳩巢派の程朱學にして、益を熊耳に得たりし者は文章なりしかと思はる、榮翁公が藩學創立の事を命せられしは、秋水四十の時なりしが、江戸を去るに臨み、林大學頭に就きて幕府聖堂の學制を問ひ、既にして藩に歸るや、奮つて興學の任に當り、學制館規、一に其の手に成り、爾來造士館の督學たる者、三十六年の久しきに及べり、榮翁公英邁達識にして、最も心を文教に留め、造士館を創立するや、銀二百四十貫目を寄存し、其の利息を以て館費を辨せしめられたりとぞ、筑前の龜井南冥が、隨に遊びて造士館を觀たりしは、創立三年目の安永四年なるが、其の南

造士館の
簡史

游紀行に左の一節あり。

龜井南冥
と造士館

子直歸り、増田(熊介)子直の弟と導きて國學に到る、子直、余を揖して曰く、贊舍祭禦殿甚し、願くは有司と謀り、快意之を觀ん、余曰く、諾、因て神農廟に詣る、廟は學の西側に在り、圓乎として敬す可し、廟南に講業の舍あり、名けて醫學院と曰ふ、門扇して入るを許さず、隙より之を窺へば、院内頗廣し、碑あり、教授先生某氏(即ち秋水)の作る所、文は穩稱誦す可し、子直謀る所を得て而して還り、揖し進みて惣門に到れば、仰高の二大字を顔せり、門内に小方池ありて橋を架し、二銅龍を置きて、水を其の口より出せり、榜を泮水橋と曰ふ、蓋し古を存するなり、橋を過ぎて又門あり、扁して入徳門と曰ふ、關して人を通せず、側に便門を設く、之を過ぐれば則ち大成殿なり、碑文は國子先生林公の制する所なり、殿に上れば、惟拜席香盤を設くるのみ、殿に接して北に廊あり、蓋し樂舎に到るなり、亦關して入るを許さず、殿及び門橋皆朱漆を以て之を塗る、光彩鑑むべし、拜畢りて而して出づ、講堂、支舍、皆橋南に在り、廣大數百人を容る可し、時に亭午、諸生業に就き、風誦の聲隱然、屋より發す、講武の館は、殿の背後に

在り、門は別に南に關き、壯大なること幾んど文館に倍せり、限閼殊に嚴なり、士人と雖も濫りに入るを許さず、夫れ學の講せざりしより、六藝各門を專にし、文武業を同くせず、是に於てか游息修藏の教廢して、而して格物致知の道壞る、道壞れ教廢して、而して士得て造る可らず、士得て造る可らざれば、何を以て學ぶことを爲さん、今薩の學を設くるは、規模宏廓、紀律嚴整、其の士を造る所以、蓋し其の法あり、我れ斯に之を未だ聞く能はざるなり、(原漢文)

以て其の規模宏壯にして、學規嚴整なりしを知る可し、藪孤山の薩に游ぶや、秋水之と唱和し、高山仲繩も亦來り訪ふて、絲毛龜の詩を求めつ、秋水は寛政六年、海門と共に江戸に遊びて、柴野栗山等とも交れり、海門の長は應酬に在り、是を以て其の名海内に馳せたりしが、秋水の功は教育に在り、故に世其の學問文章を知る者希なり、著はす所島津國史二十四冊、秋水先生文集若干冊あり、文化五年十月病んで歿しき、享年七十五なり、赤崎海門名は禎幹、字は彦禮、源助と稱す、海門は其の號なり、本貫は谷山の郷士、初め山田月洲に學び、後ち肥後の藪孤山に従游し、學業大に進むや、城下士に擧げられ、天明三年造士館教授と爲り、後ち江戸に祇役して、諸

赤崎海門

文事外交官

藩の文學と應酬せり、或は云く榮翁公薩人不文の評あるを慨き、特に海門を以て文事外交官と爲し、花々しき文字の交を結ばしめしものなりと、然ればに、や當時諸大家の詩文集中、海門との應酬多く、其の名は隆々として世に馳せ、遂に安藝の頼春水と共に、特命を以て經を昌平に講ずるの榮を得たりき、是れ栗山の推學なりけん、海門詩文に長じ、且つ幼より和歌を好み、芝山持豐の門に學べり、著す所海門遺稿の外に、歌文の著あり、享和二年、年六十四にて江戸に歿しき、此の二大儒は實に薩摩の名物なり。

薩摩の二大儒

邑學

藩學既に興れり、邑學も亦當時を盛なりと爲す、薩藩の制、巨室を封するに邑を以し、之を一所持といふ、所謂一百二都城是なり、而して加治木垂水の二邑、文學頗る盛なり、加治木の邑主島津久微(兵庫と稱し、一名天錫、字は子楳、は知覽の邑主、島津久峰、字君淡、稱木工)の長子なり、久峰學を好み、詩を善したり、(毅齋遺稿あり)しが、久微も亦才學あり、號を錦水と云ひ、書樓を名山樓と云ひしより、錦水公子又は名山公子の名あり、筑前の龜井南冥、肥後の藪孤山、伊形靈兩等と唱酬して、客を好み、賢を禮すと稱せらる、初め南冥を聘せんとして果さず、後ち長崎の伊藤瓊山、江戸の

錦水公子

伊藤瓊山

秋岡冬日

豫章公子

市川鶴鳴
入藩

都之城の
學者

種子島の
文化

秋岡冬日を聘して、學を邑中に興し、垂水の邑主島津貴澄(字温之稱美作)は豫章と號す、藩主吉貴の庶子なり、亦文學を好み、廢籠詩稿三冊、邑學文行館を創立して、士風の衰を振はんとし、讃州丸龜の儒者乾冠太(名字未詳)を聘して教授たらしめ、又尾張の市川鶴鳴(五鬼の一)を聘して顧問と爲せり、鶴鳴は初め本藩に仕へん希望ありて薩に入りしも、其志を達せず、豫章公子の名望を聞きて、遂に褐を釋きしものなるが、邑政に參與して改革する所多し、邑吏其の能を忌みて之を除かんことを謀る、鶴鳴災の身に及ばんことを恐れ、休問門前客有無、秋風昨夜入蒲廬、即今放去恩波湖、一片歸心漲五湖と賦して辭し去れり、其餘都の城と種子島とも亦文學早く開けたり、都の城には阪本正凭、稱梧桐五、隈元棟樹(字仲輔)、福山秀(字子瑩)稱九十郎、種子田友輔(字子經)、稱開五等、同時に皆川淇園に學びしが、後ち頼山陽に従遊せし大河平世則あり、種子島の文化は最も古く、十四代時堯の忠首座に於ける、十七代久時の文之に於ける、淵源する所あり、其の後關齋門に小田宗意、下村時兼あり、淇園門に平山友龍あり、其の子武世、字世伯、號西海、京師に遊びて、摩島松南猪飼敬所等と交り、漫遊詩稿を刻し、是より先き學校の創設は安永七年に在り、藩

學道士館に後るゝこと五年に過ぎざりき、而して薩の都邑を通して最も盛んに行はれし者は詩なり。

學風の再
變

風俗言語
改良

海外文明
吸收

成形圖說
實則本草

蓋し鳩巢學派の薩に入てより學者漸く詩文章の道に達せり、文章よりは詩に偏せり、是れ學風の再變なり、舊國物語に、唐明の詩集は記憶すれども、伊呂波歌を尊信する士大夫なければ、文學けだかく盛なるやうなれども、言行の實、御詠歌に當ることなく、學文古代より劣りたりと譏れるは、此の比よりの學風を評せるなるべし、此は榮翁公の文華を喜ばれし結果にもや、公は諸事華麗を好み、粗野なる風俗、閑苦しき薩摩訛の改良を企て、上方風に直すべしと達せられしより、一方には漸く浮華の弊を生じ、頼山陽後兵兒歌參看けれど、一方には古風を守りて之に抗し、士人に夏羽織を着よとありしに對して、肩に蚊帳の片を縫附けつゝ横行したりとの話もあり、數百年來の舊俗争でか一朝に改まるべき、然れど公の卓見なる早く已に海外文明の吸收に着眼し、心を經濟の學に留め、長崎より洋醫曾榮(字は子考)及び蘭語通事松村君紀(號翠崖)等を聘し、藩士中の國學者白尾國柱、漢學者向井滄浪と共に、成形圖說百卷、農事部三十冊上梓を編纂せしめ、又質問本草を著は

南山俗語考

し、琉球人をして之を支那に送りて漢名を問はしめ、自ら蘭語を學び、尤も支那語を能くし、支那に留學せし琉人との談話流暢なりしには、柴野栗山を驚かし、(琉客談記序)南山俗語考の著述もある程にて、日本文明の大先達とも謂ふべく、齊彬公(順聖院)の文明事業は、端を當時に發せり。

異學派

所謂異學には、服部南郭に學びし吉田蘭臯(名清純)市來蘭水(名政□字大澤)あり、瀧鶴臺に學びし川上嘉善あり、冢田大峰に學びし新納空翠(名時外字伯剛)あり、皆川洪園に學びし橋口隆説(名兼命)椎原國充(稱與三次)井上祐之(字信卿)等あり、何日の比なりけん、古學崩とて、學派騷動起りしことありと云ふ、或は造士館派と異學派の争なりしや否や、予れ未だ其の詳を知らず、而して學者の罪を得て遠島に處せらるゝ者多かりしは、安永興學程朱尊崇以後の事なるに似たり、文化中には近思錄崩と稱する騷動起れり、此は程朱學派中の同士打に似たれども、實は藩政上の改革の爲なりき、當時秩父太郎と云へる一豪傑あり、幼より不羈、五六歳の時蜂に

古學崩

近思錄崩

秩父太郎の生立

整されて泣きけるを、其父之を叱して、士は戰場にて矢玉に中ることもあるぞ、蜂に整されし痛に堪兼ねて泣く程ならば、戰場には出られじと云ひければ、太郎裳をかゝげて、峰の巢の上に坐しける、長じて小姓より目付に轉せし時、國老山田伯耆、太郎に諸郷を巡回して民狀を察すべきを命せしに、太郎曰く、民勞せり、實檢を要せずと、國老其の故を問ふ、太郎乃ち政弊を指摘しければ、忽ち其の職を免せられつ、太郎家貧しく竿耕して近思錄を講ず、學侶數十人、聲名隆々たり、其の友樺山主税、國老と爲るに及び、太郎も亦登用せられ、累遷して國老と爲り、秩父伊賀季保と稱す、國用空乏の折なりければ、藩主齊宣公に建言して、政弊を改革せんとし、先づ國老赤松主水市田美作以下を斥け、諸藩吏を黜涉して、悉く其の近思錄の學侶を擯用しけるほどに、道路目を以てせざるなし、或は云く、造士館の學則をも一變せんとせりと、其の反對黨は在江戸なる三位老公、即ち造士館創設の榮翁公に訴ふる所あり、秩父季保以下、或は自刃、或は遠島に處せられし者數十百人、之を近思錄崩とも秩父崩ともいふ、黨争の劇しき、殆んど水戸に似たる者あり、然れども内には斯く黨禍劇甚なるに、外に對しては常に一致團結の態度を保つは、薩人の特色にして、三州一藩七百年の舊封を保ちし所以なり。

薩人黨争と一致團結

齊彬公

榮翁公の曾孫なる齊彬公は、天下の名賢にして、其の盛徳偉業は、今更申す迄もな

薩摩府學
薩摩

し、殊に心を學事に留めしより、造士館の教育は、公に至りて振興せり、公は世子たりし時より教化に盡力し、内庫の藏書を出して貧士に貸付し、江戸藩邸に一局を設けて、文武を講習せしめ、又山崎嘉勲の四書集註、五經白文、及び史記左傳を刻して封内に頒ちたりき、四書五經は市川米庵の書にして、左傳は乾隆覆刻の宋版を重梓し、精刻比なし、世に之を薩摩板と稱したり、其の封を襲ふや、時に造士館に臨みて、親しく文武の兩技を試み、學問は倫理實用の道理に在りて、文章訓詁の末に泥む可らざるを論じ、士道の本體を失はざらんことを戒めらる、秋水以後の造士館教授には、橋口國器、市來政正、五代五峰、横山鶴汀、宮内猗々齋、山田鼎齋等の諸儒あり、才俊館中より輩出せしが、齊彬公は又榮翁公の緒を繼ぎて、文明の學術工藝に着目し、城内製煉所を創設して百工技藝を研究し、洋式砲術を採用し、集成館を磯別業に設けて、鑄砲等の業を起し、軍艦を建造して軍務を刷新し、學生を長崎に派して蘭學を修めしめ、公自ら洋學に志して、國事に關する書信には、往々洋文を用ひられしが如き、夷の思ふ所に非ざる者あり、蓋し薩摩には古來一種の曆法、始祖忠久就封の時、鎌倉より曆官を賜ひて、測候器具を備へたりと傳ふを傳へたる

造士館教授
の諸儒

文明の學
術工藝

學風三變

國學者

山田清安

か、安永八年に明時館を設けて天文を研究し、又醫學本草は榮翁公の極力獎勵せられし所、齊彬公に至りては、工學尤も開け、天下に卒先して外國文明の長を取るに急なり、是を以て士人の教育、宋學を主とするも、迂遠に陥らず、實事求是を求むる風あり、學風此に至りて三變し、其の造る所の士は、維新前の劃策と、維新後の施設とに參與して、盛んに功業を立つるを得たりき、國學には白尾國柱あり、本居宣長を慕ひしも、其の門に及はず、桂園門下に山田清安あり、清安は獨り和歌のみならず、皇國の典故に通じて、尤も考證に長し、撰著甚だ多かりしも、忠誠の志を齎らして、藩忌の下に斃れしより、畢生の精力を注ぎし稿本も、亦散逸して傳はらず、清安風に王室の式微を嘆き、勤王の志を著書に寓したりと聞けば、薩人の士氣を鼓舞するに與りて力ありしを疑はず、其の門に入田知紀、村山松根等あり、桂園派の和歌大に三州に行はる、其餘國學者には、又後醍醐院眞桂ありき、

蓋し寛永大系圖調ありしより、薩摩にも史官ありて、御記録奉行と云ひ、學者の榮職と爲り、此より掌故の學盛んにして、學者は史官教官の二途に分れたり、島津氏

史學と文
體

久光公史學
皇朝世鑑
通俗國史

の始祖忠久は、頼朝の子孫と云ひ、典例儀式、往々鎌倉に本くが故に、東鑑は蓋し古來士人に愛讀せらるゝこと、經典に齊しかりけん、其の結果は薩摩の學者中にも史官派の漢文は東鑑勝なり、而して歴史學を尙びし効果は、亦宋學をして高談空言に流れざらしむるを得けん、齊彬公の弟前左府久光公、幼より學を好み、博聞強記なりしが、尤も心を史學に留め、元治元年には、史局を本藩に開き、重野成齋翁を總修と爲し、小牧櫻泉、平田宗城、今藤勇介の諸儒を編修員として、皇朝世鑑を撰はしめられき、皇朝世鑑は大日本史を編年體に改編せし者にて、全部四十冊、翌慶應元年十二月に成れり、公は又晩年自ら修史の志を立て、退公の暇、編摩に従事して、通俗國史正續三十六冊の著あり、(正編は六國史の後を承けて、宇多天皇に始り、後小松天皇に終り、續編は稱光天皇に始まりて、正親町天皇に終れり)英雄閑日月ありと謂ふべし、抑公が維新の際に於ける功業は、平素蓄積したりし史學上より得來りし者かあらぬか。

薩摩より

薩人は極端より極端なり、無學者多き中に大學者を出し、大野蠻かと思へは、大文明黨あり、好んで粗野を街ふ中に、極めて美服を好む者あり、大迂鈍の如くにして、

人才を出し、五原因

而かも心裏明白なるあり、一端を以て薩人を評せば、正鶴を得可らず、甚しい哉、人の國の觀察し易からざるや、薩人を以て不學と爲す者は、薩摩の歴史を知らざる者なり、不學の國、豈人物を出すことを得んや、而も近來薩摩の古學を穿鑿して、學問早く開けたるに驚き、如何にも好學の風ありと爲す者は、又薩摩を知らざる者なり、薩人は古來學を好まず、故に藩主の學を勸むるや、勞せり、薩人は古來學者を尊重せず、故に學者の遠島多し、而して維新の際に多く人物を出し、は第一に七百年來の舊封、上下相結ぶこと、久しかりしより、忠義の氣に富みしこと、第二に宋學早く開けて、踐履を主とせしこと、第三に禪學は一種の感化を與へしこと、第四に古來の隼人氣性は、敏捷にして機轉に長せしより、時機を知るに敏なりしこと、第五に藩主に代々名君ありて、教養方ありしこと、以上成齋先生の說に、鄙見を交へたり、此の五原因に外ならず、扱將來は如何ん、第一の原因は消滅せり、第二の實踐道德も、今の教育のみにては覺束なし、第三は廢佛の世言ふ可きなし、第四の隼人氣性は、山陽の活眼、嘗て其の害を避けて利に就くに敏なるを諷刺せり、(送大河平世則序)昔者之を矯むるに、律義なる士風を以せしも、今は功利盛にして、仁義衰ふ、

薩摩人才
の將來

特長の氣稟は、却て墮落を助けざるを保せず、第五の代々の名君に代りて教養指導する者は所謂先輩なれども、後繼者を養成する所以に至りては、我れ未だ之を知らず、此は本編の主題に非ざるも、學問は人才を養成する所以なるより、薩摩の宋學系を叙して遂に將來の人才に説及ぶのみ、薩摩の肉食者流三思せざる可らず。

伊地知潜隱傳

漢學紀源
の著者

古來儒學の傳統を叙する者、概皆榎窩羅山を以て起點と爲し、足利時代に於ける叢林學僧の儒學研究に説き及びし者希なり、是れ一には資料獲難く、事蹟訪求し易からざりしと、二には儒佛相聞ざし結果、儒者は佛徒をして儒林に伍せしむるを欲せざりしとに因るなるべし、前者は寡聞と曰ふに過ぎざるも、後者に至りては、謂なき偏見に非ずや、而も此偏見を破り彼の寡聞に免れて、鎌室の際に起りし宋學の淵源を尋ね、禪林の幽微を闡顯して、學僧の儒學系を叙述せし者は、實に伊地知潜隱先生の漢學紀源を以て始と爲す、此の書一たび出るや、學者皆其の考證の博く且つ精しきに服し、爾後書を著はす者、一として材を同書に取らざる無し、而して予が此の編も亦漢學紀源に據りて研究の歩を進むるを得たり、則今日の學界が先生の恩を受くる者、甚だ大なり、予れ因て此に附傳す。

潜隱名は季安、初名は貞行、又季彬、字は子靜、初め安之丞と稱し、後ち小十郎と改め、一に克欽と號せり、天明二年壬寅四月十一日を以て鹿兒島に生る、父は伊勢八之

讀書中の
讀書

近思錄
と連綿

讀書中の
讀書

進貞休、母も亦伊勢氏なり、年二十の享和元年出でて、伊地知季伴の嗣と爲れり、家
固り貧、且積債ありて、田を以て質と爲し、朝夕の食も給せず、因て宅を賣りて田を
復し、實家伊勢氏に依り、尋ぎて阪元村に移れり、潜隱少きより學を好みて、貧苦の
中に書を読み、最も掌故に通じけるが、誰に就きて學びしやは詳ならず、其の親戚
に本田親孚とて史官を勤めし人あり、幼學は此の人を師としけん、既に長じて藩
の小吏と爲りき。
時に秩父太郎の近思錄崩には、潜隱も亦其の黨與に坐して禁錮せられ、文化六年
正月喜界島に謫せらる、時に年二十八なり、島民潜隱の學問あるを知り、爲に小菴
を結びて之に居らしめ、以て童蒙の師と爲しければ、其の菴に名けて潜隱と曰へ
り、是れ其の別號の來由なり、薩摩の學者に流人多く、謫居中に學問して學力長進
せし人なきにあらず、蓋し薩摩の群島は琉球との交通に因て藏書の家なきに非
ずとぞ、潜隱も亦童蒙に教授すると共に、自ら學ぶ所の者ありしなるべし。
謫居三年にして、文化八年に赦書至り、九年鹿兒島に歸りしも、猶仕途を禁せられ
しが、系圖の寫を見るに、文化十三年丙子九月二十九日、命じて細仕を赦す云々、細

禁錮四十
年間の編
者

仕せられてより、是に至りて五年に滿てりとあり、其の子季通の撰びし碑銘には、
禁錮凡そ四十年、齡六旬を踰えて、特に恩赦に遭ひ、御徒目付に擧げらるるとあり、蓋
し赦に遭ふも、四十年許りは猶無役にて贅居せしなるべし、貧士の上に無役にて
は、其困難如何なりけん、潜隱の篤學なる、謫居中に書を読み、文を作りて、其の學長
進し、最も心を故事に留め、博く古文書を搜訪し、遍く舊典古籍を涉獵して、一藩の
制度典故、士林の譜牒格式、封内の田産戸口、一として通曉せざる無し、是を以て貴
門士族の請ふて系圖家譜を撰ぶ者多く、或は紀述して質問に答へ、或は考證して
著作に従へり、其の編撰に當りては、唯事實の精からず、徵據の明ならざるを是れ
憂へて、深く稽へ博く證し、旁に引き廣く通じて、日夜屹々、倦まず息まず、殆ど寢と
食とを忘るゝに至れり、是を以て著作身に等し、而して漢學紀源も亦贅居中に成
れり、(以上家譜墓誌)

潜隱の學

潜隱の幼學は固り程朱なり、少年の時、中江藤樹の書を得て、王氏の學あるを知り、
遂に傳習錄及び陽明全集を読み、頗る其の説を好みしも、猶尊崇する所は朱學
に在り、(與一齋書)朱學は桂菴に依て最も早く薩摩に開けたりしを知り、日本國中

宋學傳統

一統尊信の朱學が薩摩より首倡せし一大事實を天下に表顯せんと欲して、漢學紀源四冊を著はせり、漢學紀源の編著に着手せしは、果して何年に在りしやを知らざるも、其の準備として編撰せし宋學傳統系圖一冊の草稿には、丁亥十二月草成とあり、丁亥は文政十年にして、潛隱年四十六なり、予の見たりし宋學傳統系圖は初稿にして、塗抹改削殆ど辨す可からざる者あるも、桂菴以下及門の緇素を記せる者参考と爲すに足れり、而も桂菴以上は猶略せしが、更に博搜慎考を積みて漢學紀源と爲るや、儒教の傳來に溯り、經籍の濫觴を尋ね、隋唐の交通、建學崇聖の事蹟、儒林の世家を叙して、古註新註の辨に及び、始て宋學傳來の淵源を研究し、無學一山虎關岐陽一鹿惟肖の徒より桂菴傳に入り、如竹喜春に至り、終りに鳩門諸子を附したり、宋儒著書の傳來は俊仍に在るべしと想定したるは、前人未發の創見にして、宋學の首倡は禪僧に在るを知りて、僧學の幽微を闡顯したるは、亦一世の卓識たり、西南の一隅に獨學して、蟄居四十年、足通邑大都を踏まず、目は名山の秘石室の藏を窺はざりし、潛隱が能く此の儒林罕觀の大著述を成せしは、學力精力並に感服すべき者に非ずや、潛隱は更に當代大儒の文を得て、薩摩宋學の事蹟

漢學紀源
の大要

學力精力

を不朽にせんと企て、自著の漢學紀源及び桂菴畫像と家法倭點一冊、同寫本一冊、延徳版大學一冊等を林家の學頭なる佐藤一齋に寄示し、桂菴の碑銘を請へりき、一齋之を見て漢學紀源の詳審に驚服し、始めて延徳版大學あるを知りて、自ら鈔寫して書後一篇を作り、更に林大學頭述齋に示せしに、亦甚だ之を奇として一本を寫し、一齋は先づ桂菴禪師影贊を作りしが、既にして昌平の儒官と爲り、數返往復の餘、四箇月許りを経て桂菴碑文成れり、潛隱は謝禮として一齋に唐扇子唐筆刻煙草又は唐紙紉縞金子三百疋等を送りしこと、漢學紀源附録に詳なり、扱建碑の一條と爲りて、藩廳の察度を蒙り、潛隱陳辯する所ありて許可を得、一齋の注文に因て、書は琉人鄭元偉に書せしめ、造士館教授の一派と協力して、遂に碑石を桂菴墓側に立てたりき、(漢學紀源附録)

潛隱六十餘にして始て召出され、御徒目付より御記録方添役、御軍賦役等を歴て、御記録奉行に榮轉せしは、年七十一の時なり、順聖公命じて藩祖得佛公(忠久)の譜圖を撰ばしめ、其の功を以て御使番と爲れり、又潛隱を總裁として公室世傳の古文書を査檢せしめ、新に裝潢を加ふる者數百卷に及び、公物を賜ふて之を賞せ

六十餘に
して出仕

られたりき、物頭町奉行格より御用人に晉みしも、其の史職を奉すること故の如く、老に至るも孜々として倦まず、慶應三年八月三日を以て歿せり、享年八十六。潜隱人と爲り淳朴にして寡慾恬靜にして和易、日夕机に倚りて筆硯に親しむこと、少より老に至るまで一日の如し、幼兒來りて膝下に戯れ、机上の草稿を破れば、平然として稿を改むるを常とし、机の引出に蓄へたる金平糖を與へて兒童を去らしめ、未だ嘗て疾言遽色せず、草稿と雖も亦皆小楷を以て之を寫し、一字苟もせず、其の精密は天性に出づ、畢生の著書數十種、其の鈔錄謄寫する所の者は、擧げて數ふ可らず、今其の書目を擧ぐれば左の如し、(碑文及口碑)

- 漢學紀源四冊 ▲同附錄一冊 ▲宋學傳統系圖一冊 ▲舊記題苑一冊 ▲管窺愚考三冊 ▲同附錄一冊 ▲秘傳島津譜圖一冊 ▲得佛公眞像及兩莊來由一冊 ▲御家古傳秘考一冊 ▲玉海拔要一冊 ▲御家譜增補一冊 ▲寛永軍徵二十八冊 ▲諸家忠死畧抄十冊 ▲御舊式類抄一冊 ▲西藩田租考一冊 ▲近秘野草一冊 ▲稔佐悟性寺御石塔考一件私考一冊 ▲同勘考書一冊 ▲國分正興寺仁王胎岳様御眞影一件愚考一冊 ▲御先代御家督様御逝去一件諸書拔一冊 ▲差杉

- 來由考一冊 ▲薩州唐物來由考一冊 ▲狩夫銀來由私考一冊 ▲一向宗御禁制愚案一冊 ▲琉球御掛衆愚按一冊

其の餘諸家系圖家譜雜記の類は略せり、潜隱歿後、其の子季通は潜隱の著書寫本等を島津家に獻じたりと云ふ。

潜隱の配は養父季伴の女なり、四男二女を生み、長は夭す、次は即ち季通にして、喜十郎と稱す、其の子は季珍、現に海軍少將たり。

彦曰く先生をして大都に游學せしめ、其精力を考据に恣にせしめば、其著書の富豊測る可けんや、贅居獨學を以して猶此等身の著あり、概皆一藩の制度掌故に關すと雖も、之を世に公にせば、舊國の古制、雄藩の殊例、史氏の採に備ふるに足る者必ず多からん、漢學紀源の一書に至りては、豈啻に薩摩文學の盛を鳴らすと云はんや、後學を裨益する者甚だ大なり、桂菴首倡の功と、並に千古に不朽なる者に非ずや。

宋學考餘錄 (終)

潜隱の生平

潜隱の著書目

潜隱の子孫

潜隱の功績

明治四十二年八月廿五日印刷
明治四十二年九月一日發行

金貳圓

著者 西村天四

發行者 杉本要

印刷者 堀越幸



發兌元

東京市京橋區中橋坂小路
電話本局五七七番
大阪市東區北波邊町
振替口座東京二八三番

梁江堂書店
杉本梁江堂

故網嶋梁川著

歐洲倫理思想史

紙數菊版四百餘頁
舶來ラフ紙刷布綴
金壹圓五拾錢
郵税金拾貳錢

煩鎖なる倫理史。冗漫なる倫理學。はあり然れど卓拔なる誠見精細なる觀察を以て批評的に倫理思想史を説述せるものに至りては世に其適著なし。本書は簡潔雅馴の筆要を摘み冗を省きて其缺陷に補せんとせるもの。教科書、檢定試験参考書として絶好なるものならず、世の道義頹敗に心ある者の必讀すべき大著也。

◎見よ！武士道の精華を！！

碧瑠璃園著 齋藤松洲畫

吉田松陰

コロタイプ寫眞版十
葉洋裝類美本紙改五
百五十頁菊版全三册
定價各金八拾錢
郵税各金八錢

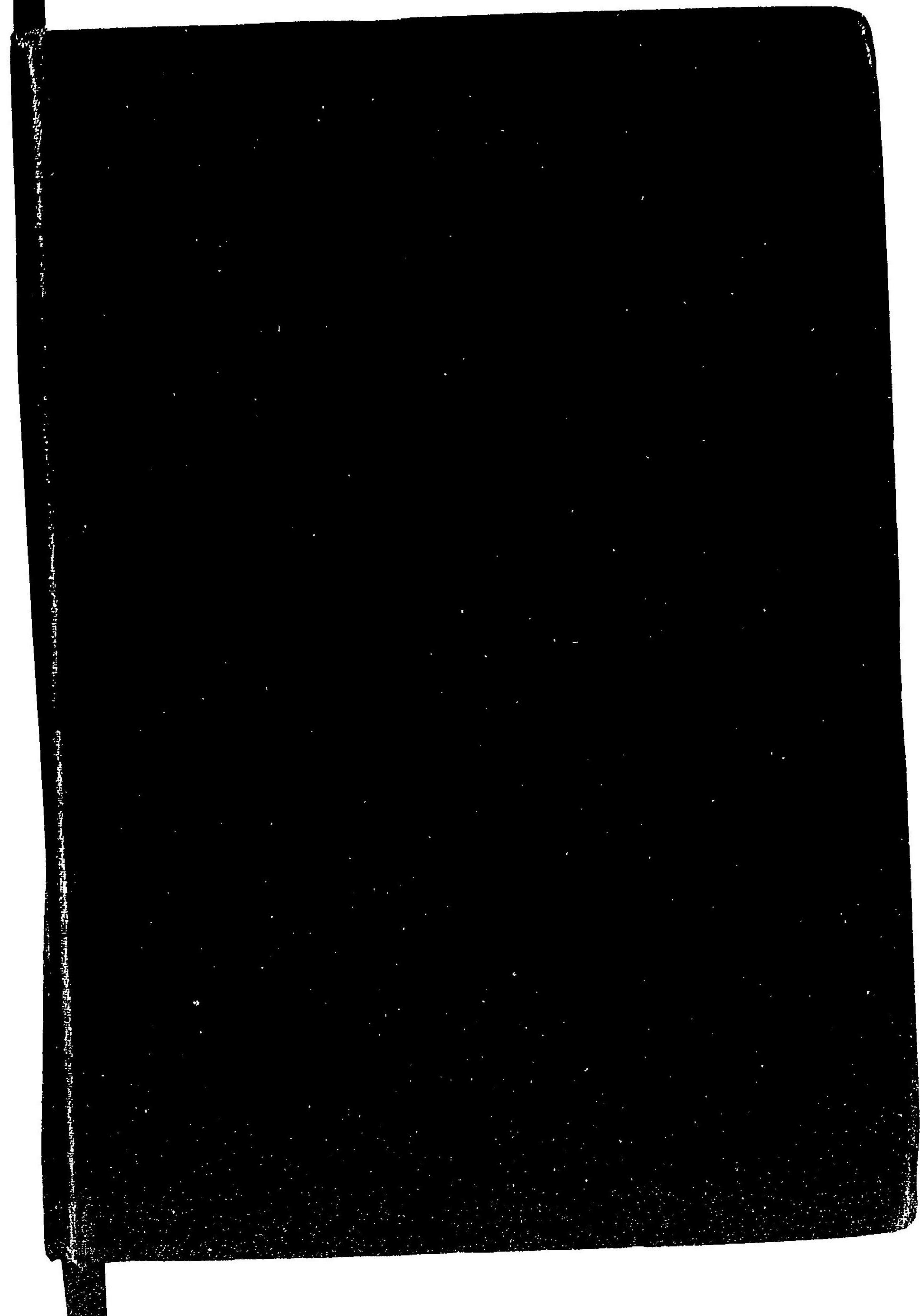
大朝新聞新刊速讀好評

松陰先生は明治維新の下手人なり、現代思潮の原動力者なり、十歳にして兵學指南の家を繼ぎ十八才にして一藩青年の頭目たりき、二十歳にして天下の志士、二十五歳にして國事犯人たりき、東海道を遠丸駕にて送らるゝ途中、その友の爲めに一領の衣を脱ぎ、下田の海に萬死を犯しては異國船に日本の大義を唱ふ、もしそれ過激の罪に問はれて江戸千住に繋せられたる事情に至りては血爲めに湧き、骨爲めに鳴り、懦夫も又起つと思ひあらん、此編傳奇小説家として當代第一の稱ある碧瑠璃園が心血を注げるの作なり、一度大阪朝日に掲げらるゝや二十萬の讀者愛誦置かず、或る時は慷慨の涙、或る時は悲痛の涙、凝て同情となり胸采となる、碧瑠璃園が眞摯なる筆致は維新經營史を傳ふるに共に一面青年立志談として、好箇の讀物たるを失はず幸に愛讀を給へ

◎讀め！維新鴻業の原動力を！！

訂正

▲目錄一の八 書來は福來▲寫真目次 島津家翁の下に公の字脱
 ▲本文三の十四 有名は有力▲六の一〇 胚胎は胎胎▲七の四 補教編は補教編▲一六の六 伊東は伊藤▲三六の一四
 則差は則差▲五九の一三 衝突は衝突▲七一の二 玉舞は玉舞 荷柳は荷柳▲七二の一 過際は過際▲同七 具葉は
 貝葉▲九〇の二二 漢泰は漢泰▲一〇五の二三 別は別▲一〇六の三 義堂は義堂▲一一九の七 大極は太極▲一
 三〇の二三 今所有の有は術▲二三二の二四 楊岐秘は楊岐派▲一三三の二〇 講惟は講惟▲一六二の二〇 清蘊は精
 蘊▲一六五の一四 がはが▲一七七の一四 踊は踊▲一八五の一 がはが▲一九七の四 教授は教授▲二〇二の二季
 安の下に等の字脱▲同四象は來▲二二二の二一 此即は此耶▲二二二の二三 にてはに▲二四三の九 大守は大守▲
 二八一の二二 飛疑は飛疑▲二八二の六 姜沈は姜沈(同七行十四行及び二九〇の十行十一行十二行並に二九一の二二
 皆同じ)▲二八七の五 問得は問得▲三二〇の五 寶直清は宝直清▲三二三の四 尾紀水とのとは術▲三二四の二二
 留水は留承▲三一五の一四 を謂はを謂▲三三二の四 是れそのそは術▲三三三の五 隱餘は隱餘▲三三三の二 百史
 は百氏▲三四三の九 甘葉節は甘葉節▲三三五の二〇 則の下に何の字脱▲同二二 爾足下は爾足下▲三五六の二 數
 書問は數書問▲三五七の七 晏口は晏口▲三五九の七 儀泰行は儀泰行▲三六〇の二三 訓詰は訓詰▲三六四の七 置
 之の下に歟の字脱▲三六七の六 葬は葬▲三七〇の五 花園帝は桃園帝▲同九 之に罔固をばにに例置▲餘錄七の二一
 君漢は君漢



121.3
N812n
Δ

009010-000-9

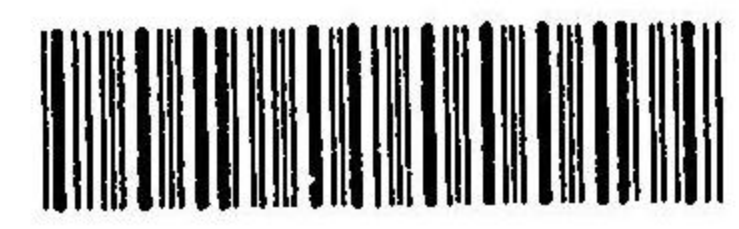
121.3-N812n Δ

日本宋学史

西村 天因/著

M42

AAD-0152



121.3 N812ms